
バカと少女と召喚獣

亜花寝子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと少女と召喚獣

【Nコード】

N2801X

【作者名】

亜花寝子

【あらすじ】

科学とオカルトと偶然によって完成された「試験召喚システム」を導入した文月学園。
Fクラスに入ることになった関根^{せきね} 朔夜^{さくや}は、幼馴染である吉井明久や坂本雄二、Fクラスの仲間達と打倒Aクラスと奮闘するのだった！

プロローグ（前書き）

始めまして、あかね亜花寝子です

初投稿であります！

グダグダですがご了承ください（苦笑）

それでは、最後までよろしくお願いします

プロローグ

私がここ文月学園に来てから2度目の春が訪れた。

桜が満開に咲き誇り、これから学園生活を始める新入生を歓迎しているようだ。

見とれるような美しさであったが私はこれからの学園生活とクラスについて頭がいっぱいだった。

「関根、遅刻だぞ！」

私が校門を通り校舎に入ろうとすると呼び止められた。

「あっ、鉄人先生。おはようございます」

「鉄人じゃなく西村先生と呼べといつもいっているだろう？」

この、黒い素肌にスーツ姿の人物こそ、文月学園、生徒指導担当の西村教諭である。

趣味はトリアスロンと、いかにもスポーツができそうな先生だ。

「ほら、受け取れ、これが試験の結果だ。」

てつじ・・・西村先生から一つの封筒を受け渡された。

「お前ほどの実力があればAクラスなど簡単に入れただろうに」

「ということはAクラスじゃなかったってことですね・・・残念です。」

Bクラスかぁ・・・それにしてもなかなか封筒があかないんだけど！

「一言言わせてもらってもいいか？」

「別にかまいませんよ、減るもんじゃないですし」

ようやく封筒の中の紙を取り出し、開いた、そこに書いてあったは・・・

「次からは名前くらいちゃんと書け」

関根 朔夜 ” Fクラス”

「絶対いやああああ!!!」

悲鳴の叫びが校舎全体にこだました。

ここから私のFクラスでの学園生活が始まっていく・・・。

プロローグ（後書き）

まだまだ冒頭ですけど、いかがでしょうか？
楽しんで読んでいただいたら嬉しいかぎりです
感想やご意見がありましたらお待ちしております

第一問（前書き）

読んでいただく人がいて嬉しいです
今回も楽しんでいただければ幸いです

第一問

「はぁ・・・、Fクラスか・・・、それも名前を書き忘れてっぺ！」

愚痴をこぼしながら重い足を引きずりながら自分に割り振られたクラスに歩き出した。

「これからは問題を解く前に名前を書こう、うん・・・」
と、一人で決心しているとバカでかい教室が見えてきた。

「うわあ、ここが名前を書いてたら私のクラスだったAクラスかぁ・・・」

Aクラスの前で足を止め、大きな窓から中を覗いてみると、スーツを着こなし、知的女性の教師が立っていた。その後には、黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさプラズマディスプレイに「高橋 洋子」と表示されていた。

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの二年A組の担任、高橋洋子です。よろしくお願いします。」

あのプラズマディスプレイ欲しい・・・、などと考えていると聞きなれた声が聞こえてきた。

「うわあ、システムディスクにリクライニングシート、ノートパソコン支給か、いいなあ！Aクラス」

ふと隣を見ると幼馴染が私と同じように窓からAクラスをみて羨ましそうに声をあげていた。

「アキくん？どうしたのこんなところで？」
「うわっ!?!・・・朔夜？」

まったく・・・、幼馴染の顔まで忘れるほどのバカだったなんて・・・

「ねえ、今さらっつとひどいこと言ったよね!?!」
「えっ?なにが？」

もしかして心の声が読まれてる!?!それともついつい本音を言っ

ちやった!?

「また罵倒された気が・・・、まあ、それはおいといて、朔夜はAクラスでしょ? クラスの中に入らないの?」

「ん? 私ね、ちよつとしたミスでAクラスに入れなかったんだよ、名前を書き忘れるというちよつとしたミスをね」

「バカだつ!」

「あ・・・アキくんにはバカつて言われた・・・」

アキくんにはバカつて言われるなんて・・・、屈辱だよ!

「で、どこのクラスになったの? Bクラス?」

「アキくんにはバカつて言われた・・・」

「ねえ! まだ言ってるの!?!」

だつて2年を代表するバカにバカつていわれたんだよ!?! この私が!

「で、結局どこのクラスになったの? 修羅のさ」それ以上言ったら殺すよ? (殺気)「ごめんなさいい!」

すぐさま土下座を始めるアキくん。

「そのあだ名は言わない約束だよね?」

そう、昔、私は修羅の朔夜と呼ばれていた頃もあったが、ある時を境にその名は消えた・・・、そうある時を境にして

「だつて、昔、そう呼んでくれて言ったのは朔夜のほうだよ?」

「昔は昔、今は今なの!」

そう、生まれ変わろうと思った日から。

「つて、朔夜、そんなことより早く行かないと遅刻しちゃうよ?」

「そんなことじゃないの私にとってわ! それもアキくん、もう十分遅刻してるから!」

「ええー、つてそうだったね」

まったくもう・・・と私はため息をつき、アキくんの肩を叩く

「ほらつ、早く行こうよ、アキくん!」

私は自分のクラスに向かって走り始めた、その後を追うようにアキくんも走り出し

「結局、朔夜つてクラスなんなのさ!」

「いや、名前を書き忘れたんだからテストの点数が0でしょう！」
「そっかあ、じゃあFクラスだね・・・えっ・・・Fクラス？」
「そうだよ、早く行くよ、アキくん！どうせFクラスでしょ」
「どうせってなにさあ！まあ・・・Fクラスだけどさ！」
あはは、と私は笑いながら自分のクラスへと駆けていく。
「ま、まっつてよ朔夜ー！」

第一問（後書き）

修羅と呼ばれていた朔夜、そしてある時を境に……。

朔夜にいつたいなにがあったのか……。

まあ、この話はまたいつか書きたいと思っております

自分で書いておいて言うのなんだけどグダグダだあゝ（苦笑）

お楽しみいただけていたら幸いです、感想などお待ちしております

第二問（前書き）

久しぶりに部活やったら疲れたよお・・・

第二問

「もう、アキくんのせいで遅刻しちゃったじゃん！」

「僕だけのせいだけじゃないよね!？」

なにを言う、アキくんがいなければ話し合わなかったもん!

「てか、初日から遅刻しちゃって皆に悪い印象を持たれないかな？」

「大丈夫じゃない?早く入ってよアキくん！」

考えすぎか、といいながらアキくんは扉を開けた。

「すみません、ちよつと送れちゃいましたっ」

「早く座れウジ虫野郎！」

うわあ、悪い印象持たれたな、絶対に!

「・・・雄二、なにやってんの？」

「・・・ん?雄二つて・・・、まさかっ？」

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

ということは、坂本がクラス代表かあ・・・、嫌だなあ・・・振り

分け試験の日になんで名前書き忘れたんだろう私!

「先生の代わりつて、雄二が?なんで？」

「一応このク「代表だからだよ、アキくん!」・・・なぜここに

いる？」

そう説明しながらクラスの中に入っていく私を教壇の上から見下ろしている坂本。

「遅れてしまつてすみませんでしたあ」

「俺の質問は無視か?!？」

クラスの中に完全に入った瞬間、Fクラスの男子が騒ぎ始めた。

「じよ・・・女子が来たああ!!！」

「なにあの子?すっげー可愛いじゃん！」

Fクラスつて男子ばかりだね・・・、うん。

「みんなよろしくね (ニコツ)」

「・・・ひゃっほー!!！」

な・・・なんなのこの歓喜の声わ！気持ち悪い！

「・・・どつかで見たことあるんじゃないかな。」

どこからか何かを呟く声が聞こえた気がする・・・まっ、気のせいだよな。

「おいっ！だから俺の質問に答えろ！」

えっ？なんか質問されてたっけ私？

「えっ？なにが？みたいな顔してるんじゃないやねえよ！」

あれ、顔にでてたかなあ？

「ちよつと、凡ミスしちゃってさあゝ、よろしくね、悪鬼羅刹」

「・・・ほお、凡ミスでお前がFクラスだと？きちんと説明してみな？」

にやにやしなからそう言ってくる、絶対わかってて言わせようとしてやがってるな・・・ムカつく！あのにやにやした顔がムカつく！あの顔がホントムカつく！

「おいっ！どんだけ罵倒すれば気が済むんだよ！」

・・・アキくんといい、坂本といい、なんで心が読めるのか不思議でたまらないよ・・・、そう思っていると後ろから声が聞こえてきた。

「えーと、ちよつと通してもらえますかね？」

後ろには寝癖のついた髪によれよれのシャツを着て、冴えないおじさんがたっていた。

「それと席についてもらえますか？HRを始めますので」

ああ・・・このクラスの担任かあゝ

「はい、わかりました」

「うーっす」

「了解です」

私とアキくんと坂本はそれぞれ返事をして、適当な席(?)に座る。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎ふくはらしんです。よろしくお願いします」

福原先生が後ろにある薄汚れた黒板に名前を書こうとしてやめた。

えっ？もしかしてこのクラスってチョークすらまともにな置かれてないわけ！？

「皆さん全員に卓袱台と座布団は至急されていますか？不備があれば申し出てください」

Aクラスとは天と地の違いなんだね！うん！

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないです！」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風邪が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を真性しておきましょう」

ダメだ、私ここで1年間暮らす自信がないよお！なにこの教室！？
廃屋かなにかかなあ！

「必要なものがあれば極力自分で料立つるようにしてください」
教室全体からかび臭い独特の匂いが漂う、きつと古い畳のせいじゃないかな。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、廊下側の人からお願いします」

先生の指名を受け、廊下側の生徒のひとりが立ち上がった、．．あれ、どこかでみたことあるような？

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

．．．木下．．．秀吉??

「というわけじゃ、一年間よろしくたのむぞい」

どこかで見たことあるような男の子なんだけどなあ．．．、ていうか、Fクラスの男子（坂本を除く）みんながあの子のことを女子を見るような目でみてるよね．．．。

「．．．．．土屋康太」

ん、小柄な子だなあ、それにしても口数少ないよね．．．、もう少ししゃべればいいのに、それにしてもこのクラス女子が少ない

よね、てか、私以外に女子いるの・・・？といろいろな考えをしていると

「です。海外育ちで日本語は会話ができるけど読み書きが苦手です」

あっ、女子の声だ！よかった、私以外に女子がいて」

「趣味は吉井明久を殴ることです」

それもいい趣味をしているね！あの子とは気が合いそうだなあ、後で話しかけてみようっと。まあ、隣でアキくんが泣きそうな顔をしているのは気にしない、気にしない

「はろはろー」

笑顔でアキくんに手を振ってるなあ」

「・・・あう。島田さん」

ふくん・・・、あの子の名前は島田さんっていうんだあ・・・覚えておかなきゃ

「です。よろしく」

ふあ・・・、だんだんと飽きてきたなあ、みんな普通でつまらないからなあ」

「コホン。えーっと、吉井明久です」

おっ、きたなアキくん！アキくんなら面白い自己紹介のはずだ！期待のまなざしでみてみるとアキくんがこつちを見て固目をつぶった、どんな面白いことをいうんだろうアキくんわ・・・

「気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね」

「・・・ダアアアーリーーン！！」「」

ぷはっ！w気軽にダーリンって呼んでくださいって、それもFクラスのひとつだがダーリンって呼び始めるとか、このクラスでできるなっ！それもアキくん不愉快そうな顔してるよ、自分で呼んでくださいっていつておきながら！w

「失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願い致します」

アキくんが席に着くと私はすかさず手でグッジョブとするとアキくんが顔をわすそうにして苦笑いをしてくる、まあ、あんな野太い

声で大合唱されたら仕方ないよねw

「です、一年間よろしくお願いします」

自己紹介は進んでいき、そろそろ私の番になろうとしていたとき、不意に教室のドアが開き息を切らせて胸に手をあてている女子高生が現れた・・・あの胸、髪の毛・・・まさか!?

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」

『えっ?』

教室全体から驚いた声があがる、そりゃそうでしょ、普通驚くよね! 「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

「は、はい!あの、姫路瑞樹といいます。よろしくお願いします・・・」

「やっぱり、みーちゃんじゃん!それにしても学年上位のみーちゃんがこんなFクラスに?」

「はいっ!質問です!なんでここにいますか?」

まあ、普通そんな質問するよね、私のときはそんな質問しなかったくせに・・・まあ、仕方ないか」

「そ、その・・・振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました・・・」

なるほど、途中退席するとテストの点数が0点扱いされちゃうんだよねたしか

「で、ではっ一年間よろしくお願いしますっ!」

うん・・・やっぱりみーちゃんは可愛いなあ」

「き、緊張しましたあ・・・」

席につくや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏すみーちゃん、そこにアキくんが話しかけようとしている、がっ、坂本が声をかぶせるようにみーちゃんに声をかける、あれだな、どうせアキくんのいやがらせだろう。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか?」

「あ、それはぼ「みーちゃん!久しぶり」って朔夜!?朔夜も

僕の邪魔をするの!？」
ふっ……もちろん!!

第二問（後書き）

・・・すごいなくなっちゃったような
どこで切っていいかわからずつついついここまでw
それも中途半端なところで切っちゃった（苦笑）
感想などお待ちしております〜

第三問（前書き）

ちよいと風邪気味でして、見直してみたら誤字が多すぎたよ（苦笑）

第三問

「えっ？さ・・・さくやちゃん!？」

「なんだよみーちゃん、親友の顔も忘れちゃったの？」

アキくんといい、みーちゃんといい、なんでそんなにビックリするかなあ・・・

「ど、どうしてさくやちゃんがここに？さくやちゃんだったらAクラス確定でしょうに・・・」

「うーん、それがさあ、名前書き忘れちゃってさあ」

「そ、そうなんですか、ちゃんと名前くらい書きましょうね？」

「そうするよ」

「で!？僕は無視なの!？」

「あ・・・明久君!？」

ちっ・・・、せっかくみーちゃんと話してたのになんで入ってくるんだよアキくん!

「姫路。明久がブサイクですまん」

さ、さすがに言いすぎじゃない坂本・・・

「そ、そんな！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ・・・」

ああ、そういえば、みーちゃんって・・・ふふっ

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

「え？それは誰「そ、それって誰なんですか!？」」

アキくんの言葉を遮るように聞くみーちゃん、まあ、そうだよな、なんせみーちゃんは・・・ふっふっ

「確か、久保」

久保？久保さんなんていたけかな・・・？

「利光だったけかな」

ぶつ W久保利光つてたしか学年次席（ ）だったようなW

「・・・・・・・・・・」

「アキくん、そんな声を殺してさめざめと泣かないの」

アキくんの頭を撫でてあげるとアキくんは少しおちついたようだ

「あつ・・・・・・・・さくやちゃんずるいです・・・・・・・・」

みーちゃんが私にしか聞こえないくらいの小声でそんなことを言うてきた、みーちゃんもすればいいのになあ〜って無理か

「半分は冗談だ、安心しろ」

「え？残りの半分は？」

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

「ずるい・・・・・・・・あ、はい？体はもうすっかり平気です」

「ねえ雄二！残りの半分は!?!」

アキくん必死だなあ〜、まあ、同姓からの好意だからね〜、てか、声大きすぎ

「はいはい、その人たち、静かにしてくださいね」

ほら、そのせいで先生に教卓を叩いて注意されちゃったじゃない！

「あ、すいませ」

バキィツ バラバラバラ

先生が叩いた教卓がゴミ屑と化した、どこまでぼろかったんだろう。

・

「え〜・・・・替えを用意してきます。少し待っててください」

先生が気まずそうに告げて急ぎ足で教室をでていった。

「・・・・・・・・雄二ちよつといい？」

「ん？なんだ？」

「ここじゃ話しにくいから、廊下で」

「別に構わんが」

あれ、どうかしたのだろうかアキくんと坂本は、廊下でなにか話しか合ってるみたいだけど・・・・まさか、アキくんが坂本に愛の告白！？Wまあ、違うだろうけど面白そうなことにかわりないし行くところかな

「みーちゃん、ちょっと廊下行つてくるね？」

「えっ？はい。わかりました」

静かに廊下にでると、アキくんが真剣な表情で坂本に話をしていた。
「まさか本当に愛の告白！？」

「折角二年生になつたんだし『試召戦争』をやってみない？それもAクラス相手に」

「試召戦争・・・？ああ、二年生からできるクラス対抗の戦争だっけ？」

「・・・何が目的だ」

「いやだつてあまりに酷い設備だから」

「まったく勉強に興味のないお前が、今更勉強設備なんかのために戦争を起こすなんて、そんなことありえないだろう」

「そ、そんなことないよ興味があればこんな学校にくるわけ

」

「嘘をつくな、お前がこの学校を選んだのは『試験校だからこその学費の安さ』が理由だろ？」

「おお、さすが頭の回りが速い坂本だね、どんどんアキくんが追い詰められていくよ」

「あー、えーつと、それは、その・・・」

「おっ、もうアキくんは良い言い訳が見当たらないみただね」

「・・・姫路の為、か？」

「ど、どうしてそれを！？」

「そうか、みーちゃんの為にアキくんが戦争を起こそうとしてるなんて、私感動だよ」

「つて、さ・・・朔夜！？い、いつからそこに！？」

「えっ、最初から？坂本は気づいてたばいけど」

「ちよくちよくこつちを見てきたからなあ」

「まあ、気づいてたがな、それにしても明久はカマをかけるとすぐに引つかかる」

「ホントだよな、なんでこう簡単にカマにかかるんだろうね」

「は・・・ハメられた！」

ハメられたって、勝手にハマっただけじゃW

「まあ、俺自身もAクラス相手に試召戦争をやるうと思っていたところだ」

あれ？坂本もやるうと思っていたの・・・どうしてだろう、坂本も設備なんて興味なさそうなのに・・・

「え？どうして？雄二だって全然勉強してないよね？」

「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明したくてな」

「ふ〜ん、世の中全てが学力じゃないねえ〜」

「・・・やめるその目は、気色悪い」

なっ！？可愛い可愛い少女にたいして貴職悪いなんて失礼な！

「どういうこと??？」

「アキくんはわからなくていいんだよ！」

そう、私は坂本の過去を知っているから分かるだけだけど

「まあ、Aクラスに勝つ作戦も思いついたしな　おっと、

先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

「あ、うん」

「後でその作戦とやらをちゃんと話しなさいよね！」

ああ、言われなくてもと言いつつ、坂本は教室に戻っていく

「アキくん、みーちゃんのために頑張るからね！」

みーちゃんは比較的体が弱いからFクラスの設備じゃ体を壊すだろうと思つてのアキくんの優しさだと思つからね

「えっ、朔夜も手伝ってくれるの？けど、朔夜勉強はあんまりやる気ないんじゃない？」

「いいの、そういう優しいアキくんを手伝いたくなつちゃったんだよ　それに私の能力を知らないわけじゃないでしょう？」

そう、私の能力・・・それは”絶対記憶能力”

「うん・・・知ってるけど、テストとかあんまりできてるイメージないんだけど？」

「アキくんに言われたくないよ！まったく・・・初めてのテストの日の順位を忘れたんだね・・・まあ、Fクラスのみみんなも忘れてた

みたいだけどね〜」
そんなことより早く入ろうよとアキくんの背中を押しながら教室に戻っていく

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

あつ、そういえば次私の番じゃん・・・、どうしよ、考えてなかった、まあ、大丈夫か〜

「ええっと、関根朔夜です、一年間よろしくおねが「ああー！！！」えっ！！？なにになに！！？」

自己紹介の途中で大声をだして立ち上がる人物がいた、いきなりなんだろうか

「関根朔夜・・・どこかで見たことあるかと思ったのじゃが、あの子かの子かのう？」

そこには、一番最初に自己紹介をした木下秀吉って子がたっていた・・・どつかで見たことある顔なんだよな・・・、それも口調も・・・ん？あの子か？

「ああー！！！！思い出した！あの子私を助けてくれた人！！」
そう、私が生まれ変わりたい、そう思った日のできごとの張本人だ・・・

「あの子は大変お世話になりました」
そういいながら頭をぺこりと下げると向こうは

「いやいや、当然のことをしたまでじゃ、しかし、同じ学校だったとはのう」

「そ、そうですね、わ、私もビックリしました」
な、なんだろう、うまく話せないよ・・・

「まあ、これからもよろしくたのむぞい」
「こ、こちらこそ」

秀吉くんが席に着こうとしたので私も席に着こうとしたら ドテッ
バランスを崩して倒れてしまった

「あいたたたあ・・・」

「おぬし、大丈夫かろう？」

手を差伸べてくる人がいた、その手に私は捕まり

「ありがとうね……って秀吉くん……？」

「ん？どうしたのじゃ？」「ボンツ」って、おぬし、大丈夫かろう？
異常に顔が赤いがのう？」

「だ、ただ、大丈夫だから」

そういうと私はすぐさま手を離し、席に着いた、そこにみーちゃんが
が耳元で小さな声でこういつてきた

「さくやちゃん、秀吉くんのことが好きなんですか？」

「そ、そんなことないよ！」

「ふ〜ん、けどお顔真っ赤ですよ？」

「うっ……、そんなに赤いかな……？」

「さくやちゃん、その反応からすると秀吉くんのことが好きみたい
ですね」

「うう……、内緒だよ？」

わかってます、といつてみーちゃんは前を向き始めた、そう、秀吉
くん、そう木下秀吉あの日、私の日常を大きく変えてくれた、私は
その日からあなたのことばかりずっと思っていた……。

第三問（後書き）

やばい、どの方向に進んでいくんだこの小説わ！（苦笑）
感想などお待ちしております

第四問（前書き）

完璧風邪をひいてしまった亜花寝子です（苦笑）
父親にpcを止められないうちに更新するんだい！！

第四問

「　　です、よろしく願いします」

順調に自己紹介も進んでいき、最後に残ったのは・・・

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

先生に呼ばれ、このFクラスの代表、坂本が教壇に立つ、さて、坂本はどんなことを言うのか楽しみだね」

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

好きなように・・・？だったら

「よろしくね、”霧島”雄二」

「さて、皆に一つ聞きたい」

あれ？無視かな？それとも聞こえてないのかな？

「”霧島”雄二、おい、”霧島”雄二くん？」

「表に出やがれ！朔夜！！」

「望むところだよ！」

「……………！！（ガンのくれ合い）」

「坂本君、関根さん、やめなさい。坂本君は自己紹介の続きですよ」

ふん、先生が止めるのなら仕方がないな・・・

「朔夜、霧島ってどういうこと？」

ふと、アキくんが私に聞いてきた、あれ？アキくんは知らないのか？

「それはね、きりし」それ以上言うと昔の通り名をここで言うぞ

？…………アキくん、忘れて」

えっ！？という顔をしているアキくん、もう修羅なんて呼ばれたくないんだよ、それも秀吉くんがいるから余計に

「皆に一つ聞きたいことがある」

そう言ったあときりし・・・もとい、坂本は教室を見渡す

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

「設備に不満はないか？」

「「「大ありじゃあつ！」「」」

二年Fクラスの魂の叫びが教室全体にこだました

「だろっ？俺だつてこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そつだそつだ！」

「いくら学費が安いからと言って。この設備はあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだつて同じ学費だろ？あまりに差がひどすぎる！」

次々と不満の聲が飛び交う、まあ、Aクラスはすごかったよね・・・

・名前書いときゃよかったよホント

「そこで代表としての提案なんだが」

おっ、坂本は引くつもりだね・・・戦争の

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

坂本、いや、Fクラス代表は戦争の引き金を引いたのだった。

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらぬ」

「俺も関根さんがいるのなら何も望まない」

「だれ？私とみーちゃんにラブコールを送る人は！みーちゃんはわかるけど、なんで私にまで！？」

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

たしかに、普通ならFクラスがAクラスに勝てるはずがない

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

だがこのFクラスは一味違う

「根拠ならあるさ。このクラスんみは試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

なんせ、あの坂本が勝てるというくらいだからね

「それを今から説明してやる」

根拠があるつて顔をしているFクラスに坂本が説明を始めた

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前にこい」

「………!!!(ブンブン)」

「は、はわっ」

小柄な子は必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る、ど……堂々とみーちゃんのスカートの中をみるなんて、やるね

「土屋康太。こいつがあの有名な寡黙なる性識者だ」

「………!!!(ブンブン)」

ムツツリーニ!?あの子が!?土屋康太つて名前じゃわからなかつたけどムツツリーニという名はこの学園じゃ有名だ!

『ムツツリーニだと……?』

『馬鹿んs、ヤツがそうだといいのか……?』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして
いるぞ……』

『ああ。ムツツリに恥じない姿だ……』

あんな小柄な子がムツツリーニなんて……

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だつてその力はよく知っているはずだ」

「えっ?わ、私ですか?」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」
「そりゃそうだろう、Aクラスで学年主席に匹敵するほどの実力者だからね」

「そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった」

「彼女ならAクラスにも引けをとらない」

「ああ。彼女さえいれば何もいらぬいな」

「ねえ、さつきからみーちゃんにラブコールを送り続けてる人はだれ!?」

「木下秀吉だっている」

「えっ？秀吉くんも？」

「おお・・・！」

「ああ。アイツ確か、木下優子の・・・」

「たしか演劇部のホープだろ？」

「へ、秀吉くんが優子ちゃんの弟で、演劇部のホープなんだ」

「当然俺も全力を尽くす」

「確かになんだかやってくれそうな奴だ」

「坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

「それじゃあ、振り分け試験のときは姫持参と同じく体調不良だったのか」

「実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！」

「うっ、ひどいよねみんな！そりゃ確かに私は始めてのテストしか名前を残さなかったとはいえ・・・忘れられるものなんだね」

「いや、実力がAクラスなのはもう一人いる」

「みんなが驚いたような顔をしている」

「おい、朔夜、お前もこっちに来い！」

「やれやれ、ようやく呼ばれたよ私・・・、一番最初に呼んで欲しかったな」

「よっと、私は席を立つと教壇のほうに向かっていく」

「おい、あの子もAクラス並の実力者だつてよ」

「あんな可愛い子までもAクラスの実力者だということのか」

か、可愛いだなんて・・・／＼

「関根朔夜、皆も聞いたことがあるはずだ」

みんなきよとんとした顔をしている・・・、ちくしょー！一人くらい覚えててくれてもいいじゃないの！

「・・・ふむ、知らんのか？こいつは・・・始めてのテストで姫路に2000点以上の差をつけて一位をとったやつだ」

「な・・・なんだって!？」

「あの初めてのテストで一位をとったやつだと!？」

「へっへん！皆もようやく思い出したようね！

「なんかAクラスに勝てる気がしてきたぞ!」

「やれる・・・俺らならやれるぞ!」

「それに吉井明久だっている」

・・・シーン

「ちよつと雄二!どうしてそこで僕の名前の呼ぶのさ!まったくそんな必要ないよね!」

「誰だよ、吉井明久って」

「聞いたことないぞ」

「ホラ!折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし!僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを

て、なんで雄二も朔夜も僕を睨むの?士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう!」

はあ・・・、折角いい感じだったのにアキくんのせいだ・・・

「朔夜!なにこいつ使えないわ、みたいな顔してるのさ!」

ば・・・ばかな!?顔にでてたの!?

「そうか。知らないようなら教えてやる

あつ、坂本あのことを言う気なんだ、まあ、私は関係ないしね」

「こいつの肩書きは”観察処分者”だ」

第四問（後書き）

うう・・・父親に怒られたよ

更新できなくなるかもしれないんで楽しみにしててくれる人

ごめんなさい（土下座）

第五問（前書き）

いやあ、風邪治って熱が引いたと思ったら試験一週間まえでパソコン禁止になり、ようやくパソコンを触れたよお・・・

第五問

『・・・それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

クラスの誰かがアキくんが一番傷つく言葉を口にする

「ち、違うよ、ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「違うよ、坂本、アホの代名詞だって」

「肯定するな、バカ雄二！それと朔夜バカもアホも変わらないからね！」

私は笑いながらアキくんをみていた

「あの、それってどういうものなんですか？」

みーちゃんが首を傾げて問いかけてきた

「それはね、教師の雑用係ってところかな？」

「具体的には力仕事とかそういうった類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすんだ」

本来の召喚獣は物に触れることはできない、いわば幽霊みたいなものなのだが、観察処分者の召喚獣は特例ってわけ

「そうなんですか？それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよね」

みーちゃんが目をキラキラとしてアキくんをみているがアキくんは

苦笑い

「そんな大したもんじゃないんだよ」

「そうだよみーちゃん、所詮はバカのバカの代名詞だしね」

「うんうん、そういうこと　　って朔夜、さらっと酷いこといわないですよ！」

えっ、事實は事実じゃん」と笑う私にアキくんはむう・・・とふてくされた

観察処分者の召喚獣は物に触れらぶんデメリットも当然ある、まず、召喚獣は教師の監視下でなければ呼び出すことはできないこと、召喚獣の負担は何割かがフィールドバックするということなんだ。

フィールドバックするらしい、フィールドバックとは召喚獣の疲労はアキくんは何割かの疲労をもたらし、召喚獣が受けた痛みはアキくんは何割か帰って来るというものである。

・・・ていうか、どうやってたらそんなことが可能なのかすごい気になるんだよね・・・

『おいおい、”観察処分者”ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?』

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな』

さすがに気づくよな、そう、戦争なんてアキくんは痛い思いするだけなんだけど

「アキくんなら大丈夫でしょ」

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二に朔夜、そこは僕をフォロウする台詞を言うべきところだよ

ね？」

えっ？なんで私がアキくんのことをフォローしないといけないんだよ

「とにかくだ。俺達の力の証明として。まずはDクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すごい大胆に無視された！」

あれ？坂本のことだからいきなりAクラスに勝負を挑むと思ってただけだな・・・

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムディスクだ！」

『うおおーっ！！』

「お、お・・・」

クラスの雰囲気には圧されたのか、みーちゃんは小さく拳を作り掲げていた・・・やっぱり可愛いな・・・

「明久にはDクラスへんp宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「・・・下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

まあ、普通は酷い目に遭うよね、だって下位勢力からの宣戦布告な

んて邪魔でしかないしね

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ
て行ってみろ」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

真顔で嘘をつくこのクラスの設備並みにひどい代表さんじゃないか
な・・・

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

普通にその友人とやらを騙してるんですけど！？

騙されているとも知らずにクラスメイトの歓声と拍手で送り出され
たアキくん、使者らしく毅然とした態度でDクラスに向かっていく。
・・・大丈夫かな？ちよつと心配になってきた

数分後

「騙されたあつ！」

すこしの時間がたってから教室に転がり込んで来るアキくんの姿が
あつた、制服こんなにもボロボロだった？

「やはりそうきたか」

「あつ、やっぱり分かかってわざと行かせたんだ」

「やはりつてなんだよ！やっぱろり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！朔夜も分かってたんなら教えてよ！」

えっ？何で教えなきゃいけないの？教えないほうが面白そうだったじゃん

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「当然でしょ、てか、坂本の言葉で騙される頭が悪いと思うよ」
「少しは悪びれるよ！」

今思ったけど。アキくと坂本って友達って呼べるのかな？

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あつ、そうだそうだ、アキくん大丈夫？」

みーちゃんと私はそういういながらアキくん近づいていった

「あ、うん。大丈夫ほとんどかすり傷　てか、朔夜が教えてくれればこんな傷負わなかったんだけど？」

「ん？そういえばそっか、ごめんごめん、今度から極力教えてあげるよ」

嘘だけどね

「吉井、本当に大丈夫？」

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」
「ああっ！もうダメ！死にそう！」

島田さん……。それは流石にひどいと私は思うよ……

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

「坂本、どうでもいいの!？」

「ああ、大丈夫だ。なにせ明久だからな」

「あつ、うん。そうだよな」

「どんな理由だよバカ雄二!それも朔夜は納得しないで!」

この教室で話すのではなく屋上で話すらしくさつき坂本が呼んだメ
ンバー+島田さんでミーティングを行うらしく坂本はクラスの扉を
開けて屋上へと向かい始めたので私たちはその後を追っていった

屋上にて

「明久。宣戦布告はしてきたな?」

「まあ、してきてなくてももう一回アキくんが行ってくればいいこ
とだしね」

「もう嫌だよあんな場所!一応今日の午後に開戦予定と告げて来た
けど」

「それじゃ、先にお昼つてことね?」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べるよ?」

今日の昼ぐらい……は……?

「ば……バカ雄二!朔夜の前でなんてことをいつてくれるのさ!」

ふん……私の前でねっ……、そういつこと……

「ねえ、知ってるアキくん？」

「な、なにをかな？」

「私の携帯のアドレス帳に玲さんって名前があるんだけど」

「はっ、ははっ、だ・・・誰かなその人」

「今ここで電話して」「ごめんんさい！それだけは勘弁を」・・・じ

やあ、ここで私に昨日の食事をいつてごらん？」

「え、えつとあ・・・水と塩と砂糖・・・かな」

「理由は？」

「今月はゲームとマンガがいっぱい　　って朔夜！？誰に電話し

ようとしてるの！？」

ちっ・・・バレちゃったか、今のうちに玲さんに電話しようと思っ
たのに

「いやっ、玲さんに近況報告を・・・」

「や、やめてよ朔夜！約束と違うじゃん！」

約束？なにそれ？おいしいの？

と、アキくんこんな会話を繰り返していると皆の視線がこちらを
向いていた

「なんかお前ら夫婦みたいだな」

「さくやちゃん・・・まさか吉井君と」

「・・・妬ましいほど羨ましい」

「あんた吉井とどんな関係なの？」

ただの幼馴染だと思っんですけど・・・、てか、みーちゃんは私の
好きな人を分かってていつてるのかな！？

「本当じゃ、まさに夫婦じゃのう」

「ひ、秀吉くん！こんなのただの幼馴染だから」

「朔夜・・・こんなのはひどいよ」

アキくんがこんなものって呼ばれたためか泣きそうになってたけど今はそんなの関係ない！

「・・・あの、良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

「えっ？」

「み、みーちゃん、お弁当はいいよ私がやるから！てか、私にやらせてください！」

「えっ、で・・・でも」

「良いの、私作りたいの、私がお弁当作ってくるから！」

「は、はい。さくやちゃんがそこまで言うのなら」

しゅしゅとみーちゃんは引いてくれた。

みーちゃんにお弁当なんか作られたら皆の命が危なすぎるからね

「・・・ふ〜ん。関根さんって随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

じつと私のことを睨んでくる島田さん・・・、私は皆の命を救ってあげたのに！

「はあ・・・、分かったよ、みんなの分も作ってくれば良いんでしよう」

「わあ、朔夜の手作りなんて何年ぶりだろう」

「俺たちにもか？・・・まさか毒を盛るきか！？」

「みんなの分で毒なんか盛らないよ！坂本だけにだったら分らないけど」

毒と言ったらみーちゃんの料理のほうだよね・・・いや、あれはどちらかというと化学兵器並だよ

「それは楽しみじやのう」

「・・・・・・・・（コクコク）」

「・・・・・・・・お手並み拝見ね」

「さくやちゃんってお料理できたんですね」

失敬な、私はアキくんよりも料理がうまいんだからねっ！

そういえば、秀吉くんにも食べてもらえるんだよ、いつも以上にはりきって作らなきゃ

「さて、話がかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？段階を踏んでいくならEクラスじやろうし、勝負に出るならAクラスじやろう？」

「あつ、私もそう思った、坂本のことだからすぐにAクラスに戦争を起こすのかと思ったよ」

「そういえば、確かにそうですね」

「まあな。当然考えがあつてのことだ」

まあ、考えがなかったら殴つてたところだけどね

「どんな考えですか？」

「色々と理由があるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

「え？でも、僕らよりクラスが上だよ？」

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれない。けど、実際のところは違う。オマエの周りにはメンツを良く

「見てみる」

「えーっと・・・」

「そりゃ私とみーちゃんはAクラス並みの点数だからね、Eクラスなんて余裕だよ」

「美少女が三人と馬鹿が二人とムツツリが一人いるね」

「誰が美少女だと!？」

「ええ!？雄二が美少女に反応するの!？」

「・・・(ポツ)」

「ムツツリにまで!？」

「私はアキくんと言われるほどバカじゃないよ!」

「朔夜まで!？どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない!」

「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリに関根」

「うっ、秀吉くんに止められたらやめるけど、止めてなければ殴ってたよ・・・」

「そ、そうだな」

「そうだね、秀吉くんが言うなら」

「秀吉が言わなかったらどうなってたんだろう僕」

「頭が良くなるほど殴られてたんじゃないかな」

「ま、要するにだ姫路に朔夜が問題がない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

「?それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの?」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら最初から目標Aクラスに挑もうよ」

「まあ、坂本にも色々とき言いかけた作戦としてDクラスに勝つ必要があるんだよね？」
「まあ、そういうことだ」

廊下で言っていた勝つための作戦のことだよ

「あ、あのー！」

「ん？どうした姫路」

「さくやちゃんが言った、さっき言いかけた……って吉井君と坂本君とさくやちゃんは前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されて」

「それはそうとー！」

アキくんの照れ隠しなのか坂本の声がかき消されるほどの大声を發した

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味無いよ」

「お前ら俺に協力してくれれば勝てる。いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

根拠も無い坂本の言葉だったけど、その言葉で皆に火がついた

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかのう」

「……………(グッ)」

「が、頑張りますっ」

「私もできるだけ頑張ってみるかな」

打倒Aクラス、FクラスがAクラスを倒すという下克上が今ここから始まる・・・みたいなの

第五問（後書き）

いやあ、ながかったなあ

久しぶりの更新ということですが、いグダグダ（苦笑）

本当は昨日更新するはずだったんだけど誤ってEscボタンを押して書いてたのが全部パーになってしまいまして（泣）

今日書くはずだった分もまとめて書きちゃいました

朔夜たちは打倒Aクラスを倒すことができるのか！？

感想&amp;ご意見お待ちしております

第六問（前書き）

見てくれてる人がいるのかどうか不安な亜花寝子ですw

第六問

〈試召戦争Fクラス対Dクラス〉

「ちくしょー！なんで私がテストを受けないといけないんだよ！」

「そりゃ、私たちの点数は0点ですし」

「つべこべ言わずに早くテストを受けるよ」

そう、私とみーちゃんは戦争が始まった瞬間テストを受けていた

試召戦争前、クラスにて

「そういえば坂本、私とみーちゃんは点数がないんだけどどうすればいいの？」

「えっ？なんで朔夜と姫路さんには点数がないの？」

「バカか明久。俺たちの点数は最後に受けたテストの点数・・・すなわち振り分け試験のときの点数になるんだ」

「そういうこと 私は名前を書き忘れて0点で」

「私は途中退席なので0点なんです」

そう、不運にもAクラス確実だったのに0点でFクラスに入ってしまったのですから

「まあ、点数の補充は戦争が始まってからやってもらう」

「ちなみに坂本、私は最初から本気をだしたほうがいいのか？」

みーちゃんはAクラス並の実力者ってみんなに知られてるから最初から本気だろうけど、私は最初のテストでしか高得点をたたき出してないからあまり有名ではないからね

「ああ、そうだな。Dクラス並の点数、一教科110点くらいを目安に補充してもらえると助かる」

「余裕だね、約10分程度で終わらせて寝かせてもらおうか」

「10分で終わるのか！？ていうか、終わったらすぐに前線に行けなっ、すこしの休息もないの!？」

「この、悪魔、悪鬼羅刹、変態！」

「いいたい放題だなおいっ！」

仕方ないな・・・15分くらいで終わらせるようにしてすぐに前線に行つてあげるか

↳ 試召戦争Fクラス対Dクラス

「さて、約110点取るの終わったっつと」

私は鉛筆を投げ出し卓袱台に突っ伏した

「って、もう110点ですか・・・、早いですね、本当に10分ですか」

「まさか本当に一教科10分でやるとわ」

「あはは、まあ、一教科くらい10分のできるよ。けど何教科も

受けたからさすがに疲れたよ」

「そりゃすごい早さでしたもんね」

「途中から腕の動く速度がおかしかったぞ」

「はぁ・・・、みーちゃんも頑張ってるね、じゃあ、私は前線に行ってくるよ」

「はい。いつてらっしゃい」

「おいっ！俺を華麗に無視だな！」

「私はテストを受けすぎて幻聴が聞こえてるようだよ・・・、みーちゃん以外に声が聞こえる」

「俺がしゃべってるからだろ！」

あれ、幻聴かと思ったたら坂本だった、まったくわからなかったよー

（棒読み

私はみーちゃんに手を振りながらクラスを出た、ついでに出る前に坂本のすねを蹴ったけど

さて、のんびりのんびり前線に向かうとしようかな

「い、嫌あつ！補習室は嫌あつ！」

と、そこで聞き覚えのある声が聞こえてきた・・・島田さんかな？急いで駆けつけてみると島田さんが縦ロールの女の子に手を引かれていた・・・、その先には保健室？

「ふふつ。お姉さま、この時間ならベッドは空いてますからね」

・・・へっ？

「よ、吉井、早くフォローを！なんだか今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするの！」

うん、だろうね。私から見てもそう思うよ

「殺します……。美春とお姉さまの邪魔をする人は、全員殺します……。」

「島田さん、君のことは忘れない！」

「まったく、普通助けるよね……。Fクラス関根が召喚を行いますサモン試獣召喚」

『Fクラス	関根朔夜	V S	Dクラス	清水美春
科学	118点	V S	41点	』

魔方陣が描かれトンファーをもった私の召喚獣が飛び出す……。つて武器はトンファーか、まあ接近戦は得意だけど

「ごめんね、縦ロールの子」

いつきに縦ロールの子の召喚獣との距離を詰め、トンファーで殴りつけた

「島田さん、大丈夫だった？」

「ええ、助かったわ。ありがとう関根さん、補習の鉄じ 西

村先生、早くこの危険人物を補習室へお願いします」

「おお、清水か。たっぴりと勉強漬けにしてやるぞ。こっちに来い」

戦死するとあの鉄人先生の補習室行きになるのがルールだ、絶対行きたくないと思っ！死なない程度にがんばろう！

「そうだ、関根さんはやめて欲しいな、朔夜って呼んでよ」
「わかったわ朔夜、ウチのことも気軽に美波って呼んで頂戴」
「わかったよ美波ちゃん」

美波ちゃんと仲良くなれたのはいいんだけど・・・アキくん・・・

「吉井」「アキくん」

「島田さんに朔夜、お疲れ。とりあえず島田さんは一度戻って化学のテストを受けてくるといいよ」

「吉井」「アキくん」

「さ、須川君、行こう。戦争はまだまだこれからだ」

「吉井いつ!」「アキくん!」

「は、はいっ」

「・・・美波ちゃん（ウチ）を見捨てた（わ）よね？」

「・・・記憶にございません」

「・・・」

「・・・」

しばしの沈黙。アキくんがそこまでバカだったなんて・・・私はがっかりだよ・・・。

「美波ちゃん、アキくんの処分はまかせて　まずは化学の点数を補充してきなよ」

「ありがとう朔夜、そうするわ」

私は美波ちゃんに手を振ると、アキくんの方に振り返った

「・・・なにか言い残すことわ？」

「・・・本当にすみませんでした」

第六問（後書き）

勉強しなきゃ・・・

ご意見、ご感想お待ちしております

第七問（前書き）

学校を休んでしまったので続きを・・・

第七問

「わかったアキくん！ちゃんと助けなきゃいけないんだからね！」
「・・・はい。本当にごめんなさい」

説教を開始してから10分くらいたつかな、まあ、アキくんも反省してるしもうこころへんでやめてあげようかな

「もう今度はきちんと助けてあげるんだよ？」

「うん。わかったよ」

「さて、戦争に戻りますか、今は一体どんな状況なのアキくん」

アキくんは中堅部隊長だからね、秀吉君とかが点数を補給してる間はここを通すわけにはいかないんだよね

「吉井隊長！横溝がやられた！これで布施先生側は残り二人だ！」

「五十嵐先生側の通路だが、現在俺一人しかいない！援護を頼む！」

「藤堂の召喚獣がやられそうだ！助けてやってくれ！」

私が思ってた以上に劣勢みたいだ

「布施先生側の人たちは召喚獣を防御に専念させて！五十嵐先生側の方は総合科目の人と交代しながら効率良く勝負をするように！藤堂君は・・・朔夜頼めるかな？」

「ふ〜ん、アキくん、部隊長らしくてかっこいいじゃん。いいよ、藤堂君は私が助けにいつてあげるよ」

『了解！』

『関根さん、藤堂君はこっちだ』

藤堂君を助けに私は戦場へと出向いた、アキくん本当に部隊長らしく的確な指示をだしてたなあ……。

「藤堂君、助けに来てあげたよ」

「おっ、関根か、すまない。」

「二年Fクラス関根朔夜、召喚します。試獣^{サモン}召喚」

『Dクラス 鈴木一郎 VS Fクラス 関根朔夜』

化学 92点 『 98点』

ああ、やっぱりさっきの戦いで少しは点数を削られちゃってたか、まあ、点数はほぼ互角だし勝てるでしょ

「Fクラスが俺の点数を超えてるだど!？」

「むっ……、ちょっとムカついた、とっとと片付けるよ!」

幸いで相手も近接武器なので距離を詰める、ていうか詰めないと当たらないもん……投げてみる?

「ていつ!」

『Dクラス 鈴木一郎 VS Fクラス 関根朔夜』

化学 戦闘不能 98点 『 』

どうしよう、トンファー投げたら当たっちゃった……、それも一

撃……。

「よし、さつさと連れてつてください、鉄じ　鉄人先生」

「関根、それは言い直してないじゃないか、まあ、戦死者は補習」

鈴木君は鉄人に担がれて補習室に連行されていった。南無三。

「さて、こんなに早く相手が倒れるとは思ってなかったからな、どうしようかなあ」

「ふう、まあ関根ありがとう、もう少しであの地獄の補習室に行くところだった」

「ん？別に大丈夫だよ。」

藤堂君にお礼され、藤堂君と一緒に中堅部隊がいるところに戻っているときスピーカーの雑音が聞こえてきた

《連絡致します》

あれ、この声は須川君……？

《船越先生、船越先生、吉井明久君が体育館裏で待っています》

ん？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

えっ……と、アキくん？どういうこと？

私と藤堂君はよく意味がわからず、急いで中堅部隊がいる場所まで戻るとそこには

「須川あああああつっ！」

と、叫びながら血の涙を流したアキくんの姿があった

「アキくん、藤堂君助けてきたよ、それと・・・、アキくんって船越女史が好きだったんだね・・・」

「ご、誤解だよ、あれは作戦っていうか」

「さ・・・作戦か、よかった。」

みーちゃん良かったね、後で言つといてあげないと

「工藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、総合残り40点です！」

「森川が戻つてこない！やられたのか！？」

さっきの放送でFクラスの士気が上がったらしい。

けど、残念ながら戦力差の影響が現れ始め、次々と悪い報告が聞こえてきた

「そろそろやばいんじゃないのアキくん？」

「そうだね、18人もいた部隊だったのに」

工藤君と森川君が戦死、せつかく助け出した藤堂くんも戦死してしま
まい

これで部隊は私含めて6人になってしまった

「明久に朔夜、あと少し持ちこたえろ！」

アキくんと撤退のことを考え始めたときにそんな檄が飛んできた。
後ろには、援軍を率いた坂本がこちらに向かって走ってきた

「援軍だ！合流される前に吉井たちを全滅させる！面倒なことになるぞ！」

Dクラスの前線部隊長の塚本君の指示がこつちに聞こえてくるけど、マズい。坂本たち援軍はまだまだ遠い場所にいる、なるべくは全員補習行きを避けたいところだ

「西村雄一郎、戦死！」

これで残りは5人、ええい、仕方ない。私が戦死覚悟でみんなを守ってみせる

「ほら、みんな下がって！私が全員相手してあげるよ 試験召喚^{サモン}」

「朔夜だけじゃ勝てないよ。それに女の子一人を戦場で戦わせられない、Fクラス中堅部隊長吉井明久、試験召喚^{サモン}」

「それを美波ちゃんの時に言えばよかったのにさ」

「ごちゃごちゃ言っじやない、Fクラスのくせに勝てると思ってるのか？」

「そんなこといって負けたらかつこ悪いけど」

「先生、Dクラス笹島圭吾行きます！試験召喚^{サモン}」

『Dクラス 笹島圭吾 VS Fクラス 関根朔夜&am

p・吉井明久

化学 99点 98点&mp;9点

』

「・・・アキくん」

「正直悪かったと思ってるよ」

9点って・・・どうやってたら取れるのか教えて欲しいんだけど

「ま、まあ、朔夜がいればなんとか「頑張れアキくん」、私見てるから」「やる気なし!？」

「無視してんじやねえよ!」

おっ、今笹島くと戦ってる最中だったっけ、アキくんの点数が悪すぎて忘れちゃってたよ

「よし、アキくん。まかせたよ」

「無理だって!この点数差みてよ、相手の10分の1しかないんだよ!」

仕方ないな・・・、また投げてみる?

「ていつ!」

片方のトンファアを手に取り、笹島くんの召喚獣に向かって投げつけたらサツとよけられた

「・・・って、よけられたよ!」

「普通よけられるよ朔夜・・・」

なっ、だってさっきの人普通に当たってたよ!?

「仕方ない、僕が体勢を崩すからその間に武器とってきてよ?」

「はいはい、了解であります」

アキくんは観察処分者のため、召喚獣のあつかいが慣れている、ていうか、さっきからすごい勢いでアキくんばかり攻撃されてるけ

ど、一発もあたってないや

「そんな大振りで当たると思わないで・・・よっ!」

アキくんの召喚獣が笹島くんの召喚獣の足に一発入れ、体勢を崩したその隙に私はトンファーを取りにいき笹島くんの召喚獣に一撃を入れた

『Dクラス 笹島圭吾 VS Fクラス 関根朔夜 & a m

p・吉井明久

化学 17点 98点 & a m p ; 9点

』

「ちえ、流石にとどめはさせなかつたみたい・・・」

「まあ、朔夜の一撃であそこまで減らせたんだからよかつたよ」

「おい、笹島一人じゃきついだらう、他のやつらは数人にまかせて俺も手伝うよ」

「ああ、頼むよ中野」

よく見ると私たち以外の人たちも戦っていた。みんな戦死しなければいいんだけど

中野くんの召喚獣が現れ、頭上に49点と表示されていた

「戦死者は補習!」

どんどん部隊の数が減っていく6人いたのも残り3人、そろそろやばい。

私は中野くんの召喚獣の攻撃をトンファーで受け止めながらそう思っている

「待たせたな、吉井に閔根！五十嵐先生！Fクラス近藤吉宗が行きます！試獣召喚サモーン」

そこへ援軍がようやく到着したようだ

「くっ！ここは退くぞ！全員遅れるな！」

敵の部隊長の塚本くんが撤退命令をだした、正直助かったよ

「深追いするなよ。俺たちも明久の部隊を回収したら一旦戻るぞ」

こっちはFクラスの代表さんか・・・

「ていうか、もっと早く援軍よこしてよね！」

「お前が俺のすねを蹴って行くから少し遅れたんだ」

「・・・ごめんなさい」

くっ、私が蹴らなければなんて理由を使われるとなにも言い返せない・・・

「とにかく立て直すぞ」

アキくんの部隊は一旦教室に戻り回復試験を受けることになった

教室に化学のテストを受け終わった後

「明久よくやった」

坂本がすっごく晴れやかな笑顔でアキくんにそう言っていた

坂本があそこまで褒めるなんて、それもアキくんを、どっという風の吹き回しだろう？

「校内放送、聞こえてた？」

「ああ。バツチリな」

ああ・・・、アキくんの不幸を喜んでるわけだ、納得

「雄二、須川君が何処にいるか知らない？」

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

「やれる、僕なら殺せる・・・！」

「殺っちゃだめだからねアキくん」

「とめるんじゃない朔夜、僕はやつを殺るしかないんだ」

あらら、これは本気で殺るのかあ

「ちなみに、だが、あの放送を指示したのは俺だ」

「シャアアアアッ！」

おっ、どこから包丁取り出したんだい？それも避けにくい致命傷になりやすいところを的確に狙っているね

「あ、船越先生」

坂本がそういった瞬間アキくんは目にも留まらぬ速さでロッカーの中に飛び込んだ

「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着をつけるか」

「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、頃合じゃろっ」

「……(コクコク)」

「おつしゃ！Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

『おうつ！』

「みんな、アキくんの心配はしないんだね」

教室から皆が出て行く、テストを受けた直後で動きたくないけど私も行くでしょう

「あー、明久」

坂本が教室を出る前にアキくんを呼んだ

「船越先生が来たっていうのは嘘だ」

こう告げながら坂本が引きいるメンバーは外に出て行った
さて、私も戦場に向こうかな

アキくんがロッカーからでてからすごい勢いで坂本を殺しにいったのは気のせいだね

他のクラスが下校を始めたため、教師が捕まりやすかったところで戦いが始まっていた

「坂本、塚本くん私がもらっていいよね」

「ん？ああ、できるのであれば別にかまわない」

代表を討ち取るのはみーちゃんの役目だから私は塚本くん*で我慢*しなきゃ……

「じゃあ、塚本くん。私サモンがその首をもらうよ 試獣召喚」

「そう簡単に負けるかよ！試獣召喚」

塚本さんの点数は107点と表示された、私の点数は・・・

「な、Fクラスでその点数だと!」

152点と表示されてた、しまった、とりすぎちゃったかな・・・
まあ、いいか

「ふふつ ばいばい」

塚本さんの召喚獣をトンファーで一気に殴りつけた

「Dクラスの塚本さん、討ち取った!」

大きな声でそう報告すると、士気が一気に上がり始めた
さて、みーちゃんが平賀さんだっけ? Dクラスの代表を討ち取るの
を見に行こうかな

「ちくしょう!あと一歩でDクラスを僕の手で落とせるのに!」

「何を言うかと思えば、彼氏くん。いくら防御が薄く見えても、さ
すがにFクラスの間人間が近づいたら近衛部隊が来るに決まってい
るだろう?ま、近衛部隊がいなくてもお前じゃ無理だろうけど」

ていうか、Fクラスの扱って酷いんだな・・・
というか、平賀さんの対応は私でもムカつく!

「それは同感。確かに僕には無理だろうね。だから 姫路さん、
よろしくね」

「は?」

『何をいつてるんだ、この馬鹿は?』といった顔をしている。

そっか、みーちゃんがFクラスだってことはしるはずがないもんね

「あ、あの……」

「え?あ、姫路さん。どうしたの?Aクラスはこの廊下は通らなかつたと思っけど」

「いえ、そうじゃなくて……」

「みーちゃん、ファイト」

「あつ、さくやちゃん……、頑張ります。Fクラスの姫路瑞樹です。えつと、よろしくお願いします」

「あ、こちらこそ」

おつ、平賀くんが戸惑ってるかな?そりゃAクラス確実の子がFクラスにいるんだもんね

「その……Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「……はあ。どうも」

「あの、えつと……さ、サモン試験召喚です」

『Fクラス	姫路瑞樹	VS	Dクラス	平賀源二
現代国語	339点		129点	』

おつ、流石みーちゃんだね、300点超えかあ

「え?あ、あれ?」

「じ、ごめんなさいっ」

その大剣に似合わず素早い動きで相手を切りつけた、平賀くんの反撃も許さず、一撃でDクラスの代表を下し、この戦争は決着がついた

第七問（後書き）

ようやくロケラスとの戦争終了ですね・・・
ご意見や感想をお待ちしております

エピソード0（前書き）

Dクラスとの試召戦争編が終わったので一息といふかなんといふかで朔夜が昔修羅と呼ばれる前のお話を書きたいと思います

エピソード0

これは私・・・関根朔夜が昔、修羅と呼ばれる前の3年生くらいのときの話である。

「わ・・・私の筆箱・・・」

そう、私は昔から明るい子ではなく、おとなしく、口数の少ない子供だった

「筆箱？ああ、これのことか？」

「きたねえー筆箱だな、こんなのごみと同じだよな」

「そうか、なら捨てちまおうぜ」

「や・・・やめて、返して」

私は抵抗するけど「うるせー！」と蹴られ殴られる毎日であった
私は次第に学校に行くのがいやになっていた

私がいじめられる原因、それは、私の能力・・・絶対記憶能力のせいである。

絶対記憶能力、一度覚えたことは忘れない、忘れたと思ったことは忘れることができるという便利な能力だ
だが、私はその能力のせいでいじめにあっていた。

父親はこの能力を誇らしげに思ってるらしく、親戚や近所、会社の同僚など至るところで私の能力の自慢をしている。娘がその能力のせいでいじめにあってるとも知らずに……。

えっ？母親？お母さんは……とうの昔に亡くなってるの、そういえばお母さんが亡くなってからかな……私の能力が開花し始めたのわ

その日も私はいじめられていた、ただ、今日はいつもとは違った

「や、やめてよ、それは大事な……大事なお母さんの形見……」
「お母さんの形見だってよ、こんなものを学校にしてくるからいけないんだよ！」

その日は、お母さんの命日だった、命日だったからか私はその日、お母さんの形見の首飾りをして学校に言ったのが運の尽きだったのかもしれない……いや、首飾りをしていったからこそ

私から首飾りを奪い取った子はあることかその首飾りを踏みつけようとしていた、もう駄目だと涙がこぼれだしたとき、急にクラスの扉が開いた

「なにやってるの！関根さんが泣いてるじゃないか！」

そこに入ってきたのはこのクラスのムードメイカーだった吉井明久くんだった

吉井君……、アキくんは私の首飾りを奪い返し、いじめてる子たち

「なんでいじめるの!? 関根さんがなにかやったの!?」

「うるせえ! あいつの能力が気に入らないんだよ!」

「能力なんか関係ない! 関根さんは関根さんだ! 能力がうらやましいからってやっていいことと悪いことがある!」

初めてだった、初めて私を能力で判断しない、初めて私をかばってくれた、初めて私は私だなんて言われた

その言葉を聞いた瞬間さつきとは違う理由で涙が溢れ出してきた

「・・・まれ」

「はっ? お前何いつてるんだ?」

「関根さんに謝れ!」

「ふざけてんじゃねえよ!」

アキくんはいじめっ子に殴られた、それでもアキくんは

「関根さんに謝れ!」

「うるせえな!」

「や、もうやめてよ!」

アキくんは殴られても殴られても立ち上がり同じ言葉を繰り返した、結局いじめっ子が気味悪がって帰ってしまうまでアキくんは同じ言葉を繰り返し言い続けてくれたのだ

「え、えつと・・・吉井君? だ、大丈夫・・・? すごい傷・・・」

私が今にも泣き出しそうな顔を見るとアキくんはこっちを見てニッと笑った顔を見せ

「大丈夫だよ、関根さん」

口を切り、服などもぼろぼろになったアキくんがそう言ってきた。
・
どう見ても大丈夫じゃなく、今にも倒れそうなアキくんの姿を見て私は強くならなきゃいけない……。もう二度とアキくんがこんな姿をしないように……と

それから私は空手、合気道、総合格闘技などいろいろな分野を習い、おとなしく、口数の少なかったのが嘘のように変わり、今みたいな明るい性格にまでなった。

それもこれもアキくんがいなかったら今の私がないことだ、だからアキくんには感謝を仕切れないほど感謝している、私たちはその日以来良く遊ぶようになり、次第にいじめはなくなっていくた

そして今現在

「朔夜、どうしての？そんなものふけた顔をして？」

「いやあ、アキくんが私のことを助けてくれた日のことを思い出してね」

「ふん、そっか」

「そういえば、アキくん、クッキー焼いてきたけど食べる？」

「わい、食べる食べる、朔夜が焼くクッキーおいしいんだよね」

「そりゃどうも」

アキくんがおいしそうにクッキーを頬張る姿を見て私はクスツと笑った

「アキくん、おいしい?」

「うん、とってもおいしいよ」

その笑顔は助けてくれた日の笑顔に良く似ていた・・・

「つて、私考えてみるといっぱい助けられてるんだなあ」

「ん? どういうこと?」

「いやあ、アキくんにも助けられたし、秀吉くんにも・・・ねっ」

「秀吉にも助けてもらったことがあるの? いついつ、どんな風に?」

「それはね・・・おっしえな〜い」

「なんだよそれー、待て朔夜、正直に話すんだ」

い〜や〜といいながら私はアキくんから逃げてゆく、それを追いかかるアキくん

クッキーでも置いとけばアキくんはつられるはず!

逆方向の道にクッキーを置いていくとみごと罠にはまり、違う道を進んでいった・・・つて単純すぎる

「秀吉くん、アキくん・・・、私は絶対忘れないよ、助けてもらった日のことは」

少し赤みのかかった夕暮れに誰にも聞こえないようにそっすぶぶやいた

エピソード（後書き）

さてさて、グダグダだな（苦笑）

「意見&amp;amp;感想お待ちしております」

第八問（前書き）

一週間ぶりくらいの投稿ですかね・・・
テストの点数が悪くてpcを少しの間封じられてた（泣）

第八問

おはよお〜・・・って、えっ?」

試召戦争の翌日、私は朝眠い目をこすって教室に入った・・・ってあれ?

Dクラスの設備に変わってないんだけど・・・?

「坂本おおお!!!」

「うおっ!? 待て、入ってくるなりドロップキックをかますな!」

ちっ、よけられたか・・・

「説明してもらおうか、なんでFクラスの設備のままなんだよお!」

「ん、お前にはまだ説明してなかったけか?」

「ふ〜ん・・・まあ、考えがあつてのことなら別にいいんだけど」

「実はな・・・っておい! いいのかよ!」

「その顔はなにか考えてのことだ、つと物語っておるよお〜」

「まあ、話す手間が省けたからな・・・まあ、いいだろう」

まあ、Aクラスを倒すためには必要なんだろ〜

「おはよ〜」

「おう明久時間ギリギリだな」

「あつ、アキくんおはよ〜、それと二時間目の数学のテストだけど監督の先生船越先生だつてさ」

「おはよ〜、朔・・・夜? 今なんと?」

あれ? 聞こえなかったのかな? やっぱりバカなのかな?

「あっ、アキくんおはよ〜」

「違うよ！その後！」

その後？ええーつと・・・

「二時間目の数学のテストだけど監督の先生」

「そう、その後が聞きたいんだよ！」

ああ〜、そっか、その後が聞きたいのか〜

「だってさ」

「違うよ！その前だって！！」

「あはは〜、監督の先生船越先生だってさ」

「・・・はっ、はは〜、やだな〜そんな冗談やめてよ朔夜・・・」

すごい冷や汗をかいてるねアキくん〜、それもそっくだよね〜

「うん、冗談だよ〜」

「えっ？よかった〜・・・、本当に監督の先生がふな「実は二時間目じゃなくて一時間目なんだ」って、そこはいつでも良かったよ

！！！」

「まあ・・・頑張つて生きてね・・・アキくん」

「イヤアアアアア！」

生存確率は五分五分と言ったところだよね・・・

「うあ．．．づかれた．．．」

「はっ！また寝ちゃった」

「．．．朔夜は余裕だね」

「あつ、ヤバイ．．．、名前書いたっけかな？」

「また!？」

またとは失礼な．．．まあ、一番大事なテストで名前書き忘れたけどさ．．．

「うむ、疲れたのう」

くっ．．．秀吉くんって男の子だよね!？

私より可愛いじゃないかそのポニーテール．．．。

「私も髪型変えようかな」

「関根よ。おぬしはそのままの髪型が可愛いと思うぞ」

「へっ．．．？あ、ありがとう．．．」

いいいいい、今秀吉くんに可愛いって．．．／／／

「よしッ昼飯食いに行くか！」

「あッウチも一緒していい？」

「じゃ僕は贅沢にソルトヴォーターでも．．．」

．．．ん？ちよつと待って．．．、なんか忘れてるような．．．あつ！

「ちよーつと待ったー!!！」

「ん？どうかしたの朔夜？」

「いや・・・ほら、昨日の約束の・・・」

「おお、もしや弁当かの？」

「うん 迷惑じゃなかったら食べる？」

昨日みーちゃんが作ると言い出す前に私が作ると言ったから本当に作ってきたんだよね

「迷惑なもんか！ねッ雄二！朔夜の手料理なんていつぶりくらいだろ！」

「ああそうだな。ありがたい・・・が、毒をも盛ってないだろうな？」

「今からでも坂本だけ取り分けて持って差し上げようかな？」

「・・・（ガンのくれ合い）」

「ほら、お主らやめるのじゃ・・・せつかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなく屋上でも行くかのう」

秀吉くんがとめるならやめようかな・・・、坂本のやつ・・・、今度本当に盛ってきてやるう！

「だったらお前らは先に行ってくれ」

「ん？雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買ってくる昨日の礼も兼ねてな！」

「おっ、坂本にしては気が利く」

「お前の分は買ってこないがな」

「じゃあ、坂本の分の弁当は無しだね！」

「・・・（ガンのくれ合い）」

「だからお主らはやめるのじゃ！」

毒ってどうい毒がいいだろう・・・、王水・・・は薬品だしなあ

「ちっ・・・まあいい。きちんと俺の分とっておけよ」

「あのお・・・じゃあ私も手伝います。坂本くんだけじゃ持ちきれないでしょうし」

「おっ、ありがとうな姫路」

みーちゃんと坂本が教室から出て行き飲み物を買いに行き、その間に私たちは屋上へと足を向けた

く屋上にて

「天気が良くてなによりじゃ」

「そうだね」

空は雲が一切ない青空、まさにお弁当日だった。

「人もいなくて貸切状態だし日差しと風が気持ちいいね」

「うむ、そうじゃのう」

「・・・（コクコク）」

「あはは・・・あんまり自信ないんだけどね・・・」

といって私はお弁当を取り出し重箱の蓋を取る

『おおっ！』

みんなが一斉に歓声を上げ始めた、中身は、から揚げ、エビフライ、シウマイ、厚焼き玉子、おにぎりなどなど、いろいろなものを入れてみたんだけど・・・。

「さて、召し上がれ。口に合えばいいんだけどね……、言っとくけど全部手作りだよ?」

「さすが朔夜だよ!どれから食べようか迷うなあ……、じゃあこのエビフライを……」

「……(パクッ)」

「あッずるいぞムツツリーニッ!僕のエビフライを!」

「……うまい!」

「えっ?そうかな?……良かったあ」

最近お弁当なんか作ってなかったから少し不安だったんだよね……

「むう……、じゃあ僕はこのから揚げを……」

「どれ、わしも頂こうかのう(ひよい)」

「あッ秀吉まで僕のから揚げを!」

「明久のだけじゃなかるう……うむ、これは絶品じゃのう」

「そ、そう?ありがとう」

秀吉くんの口に合って良かったよ

「まったく、僕はこの厚焼き玉子を……」

「待たせたな!へ 旨そうじゃないか!どれどれ……(ひよい)」

「あッ雄ニキサマー!」

「ん、どうした明久?……旨いな。本当にお前が作ったのか?」

「失礼な、私が全部作ったんだよ!」

「へー、意外な特技だな。それにしても味付けが絶妙だ」

「ん?ありがとう」

坂本に褒められるなんてすごい変な気分だよ……

「わ、私もいただきます（ぱくつ）」
「ん、みーちゃんも帰ってきてたんだ〜、どう?」
「・・・すごいおいしいです」
「そう?よかったあ〜 作ってきたかいがあったよ〜」
「・・・そうね、すごくおいしいわ」
「美波にもそう言ってもらえると嬉しいな」

よかったよかった、どうやら好評で

「あのお、さくやちゃん。今度私にも料理を教えてくださいませんか?」
「あつ、ウチにも教えて!」
「ん?別にいいよ 今度家にも遊びにおいでよ〜、そのとき教えてあげる」

特にみーちゃんには教えておかないと・・・、死者が出るからね・・・。

「ねえ、そのとき僕も行っていい?」
「う〜ん・・・、いいよ どうせ試食しに来たいんでしょ」
「あはは・・・ばれた?」
「ばればれだよ〜」

まあ、みーちゃんもいることだしいろいろな意味でアキくんがいたほうがいいかもしれないしね!

「そついえば雄二よ、次の目標なのじゃが」
「ん? 試召戦争のことか?」

見ればもう重箱いっぱいに作ってきたお弁当がなくなっていた
・・・って、あれ？私食べてないんだけど・・・まっ、みんなに喜
んでもらえたしいつか

「相手はBクラスなのかのう？」

「ああ。そうだ」

「どうしてBクラス？目標はたしかAクラスだったよね？まさか坂
本が怖氣ついたなんてことはあるわけないし・・・」

「ああ、怖氣づいてはいない・・・が、どんな作戦でも、うちの戦
力じゃAクラスには勝てやしない」

坂本らしくもないなあ、戦う前に降伏宣言だなんて・・・

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎討ちに持ち込むつも
りだ」

「一騎討ちかあ、当然Bクラスを使うから次の相手はBクラスつ
てわけか」

なかなかいいアイデアを使うんだね坂本ってさすが元神童って呼ば
れたことはあるよね

「え？どういうこと？」

さすが現観察処分者のアキくん、馬鹿だね

「さすが朔夜だ、頭の回転が速くて助かる。さて明久、試召戦争で

下位クラスが負けた場合の設備がどうなるか知っているな？」

「え？も、もちろん！」

アキくん絶対知らないよね、その顔わ・・・

（吉井君、下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされるんですよ）

さすがみーちゃん。分かってるし優しいね、教えてあげるだなんて

「設備のランクを落とされるんだよ」

「・・・まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ」

「そうだね。常識だね」

それはアキくんが常識がないと言ってるものだよ？

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

「ムツツリーニ、ペンチ。それと朔夜は縄か紐をくれ」

「・・・（コクツ）」

「ごめん坂本、鎖で我慢してくれる？」

「仕方がないな」

「待って、僕をどうする気なの！？」

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

ここですかさずフォローに入るみーちゃんはやっぱり優しい子だね

「つまり私たちのクラスに負けたクラスは最低な設備と交換されちゃうってことだよアキくん」

「ああ。そのシステムを利用して、交渉する」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろう」

やっぱり、ここまで考えてるんだ坂本って……。

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「なるほどね！」

ようするに、学年で二番手のクラスと戦った後に休む暇なくまた戦争はきついからね。

「じゃが、それでも問題はあるじやろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎討ちよりも試召戦争の方が確実にあるのには確かじゃからな。それに」

「それに？」

「そもそも一騎討ちで勝てるのじやろうか？こちらに姫路がいるとうことは既に知れ渡っていることじやろう？」

やっぱり、私って戦力として考えられてない！？

私も一応Aクラス確実に言われてただけだなあ！！

「そのへんに関しては考えがある。しかも朔夜を使わないで……だ。心配するな」

「私は大いに不満だよ……、秀吉くんには坂本には私は戦力扱いさ

れてないみたいだし」

「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後で教えてやる」

華麗に無視されましたよ私!!

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったなら、Bクラスに行つて宣戦布告して来い」
「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

そりゃそうだ、坂本が行けばやられる心配はないだろうし、アキくんはDクラスで酷い目にあつてるもんね」

「やれやれ。それならジャンケンで決めないか」

「ジャンケン？」

あれ？坂本が何も考えが無しでジャンケンなんていう三分の一の確立で負ける勝負なんてしないはずなんだけどなあ……

「OK。乗った」

「よし、負けた方が行く、で良いな？」

アキくんが坂本にコクリとうなずいて返した、それにしても坂本のやつなにを考へてるんだらうか……？

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいいこと」

心理戦……あっ、なるほど。そういうことが

「わかった。それなら、僕はグーを出すよ」
「そうか、それなら俺は」

私が考えてることが正しいなら・・・

「お前「アキくん」がグーを出さなかったらブチ殺す」
「ちよっ・・・なにそれ!? それと朔夜、なんではもってるの!？」
「こんなことくらい大体予想がつくよ」

やっぱりそういうことだよ。坂本が負ける可能性がある勝負をアキくとやるはずがないし

「行くぞ、ジャンケン」

「わああっ!」

パー（坂本） グー（アキくん）

「決まりだ。行って来い」

「絶対に嫌だ!」

「アキくん、勝負に負けたんだから!」

「そうだぞ明久、それとDクラスの時みたいに殴られるのを心配してるのか?」

「それもあるけど、僕の意図していた心理戦と違ってた!」

「それなら今度こそ大丈夫だ。保障する。なぜなら、Bクラスは美少年好きが多いらしい」

「そっか。それなら確かに大丈夫だねっ」

アキくんが美少年・・・? いやいや、美少年ではないだろ

「でもお前不細工だしな・・・」

それもそれで酷いと思うけど！？不細工まではいかないと私は思うけどな

「失礼な！365度どこからどう見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「5度だけじゃ不細工じゃんアキくん」

「三人なんて嫌いだよ」

「とにかく、頼んだぞ！」

泣きながら屋上出て行くアキくん、坂本がそんなことを言うと、昼食はお開きとなり、再びテスト漬けの午後が始まった。まっ、寝てるから関係ないけどな

「いつとくが朔夜、ちゃんとBクラス並みの点数が取れてなかったら秀吉に昔の通り名をばらすからな」

「イエッサー、頑張らせてもらいます！」

前言撤回、これは寝てる暇じゃない！

第八問（後書き）

次からBクラス戦です

一段落したら朔夜のプロフィールでも作りたいたいと思っています！

感想&ご意見などお待ちしております

第九問（前書き）

やっぱり毎日更新は難しいのかな・・・

第九問

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇にたった坂本が私たちの方を向いている。

午前中テスト漬けで正直めんどくさかったよ・・・。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路に指揮を取ってもらおう。朔夜はその補佐として姫路を助けてやってくれ。野郎共、きつちり死んで来い！」

「が、頑張ります」

「まかせておいてよ」

『うおおーっ！』

指揮を取るのがみーちゃんだからか、さっきよりモチベーションがあがったFクラスだった。

キーンコーンカーンコーン

昼休みが終了のチャイムが学校中に鳴り響く。いよいよBクラス戦開始だ。

「よし、入ってこい！目指すはシステムディスクだ！」
『サー、イエッサー！』

皆が教室から全力でBクラスへと向かう廊下へ駆け出した、さて、私も行くとしようかな？

ゆっくりゆっくりみーちゃんと歩きながら前線へと出向き私たちが見た光景は・・・

『Bクラス 金田一裕子 VS Fクラス 武藤啓太
数学 159点 69点』

圧倒的な戦力差だった。

うーん・・・、ここまでの戦力差を見せられて士気がさがられても困るし・・・ここは。

「ここは皆の士気を落とさないためにもみーちゃん、入ってきてもらえるかな？」

「ふえ？あつ、はい。」

とことこと前線に行ったみーちゃんの姿を見て、優しい子だと思う。
私は補佐としてついてきたのになんで私が指示してるんだろうな・・・

「遅れました、ごめんなさい」
「来たぞ！姫路瑞希だ！」

さすがみーちゃん、もう知れ渡ってるよね。

「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど・・・」

「はい、わかってます。さくやちゃんに言われていますし」

「朔夜に？」

「そう、私が指示したんだもん」

そうアキくんに寄りながらそういった。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしく願います」

早速勝負を挑まれるみーちゃん、敵にとっては早めに倒しておきたいんだろっけどさ

「律子、私も手伝う！」

え？まさか二人がかりなんて予想してなかったけど・・・問題ないよね

『サモン試獣召喚！』

掛け声と共に魔方陣が展開され、三対の召喚獣が召喚された。

「あれ？姫路さんの召喚獣ってアクセサリーなんてしてるんだね？」

「へっ？アクセサリーって・・・ふん、さすがはみーちゃんだね」

よく見るとみーちゃんの召喚獣だけにアクセサリーがついてあった

「あ、はい。数学は結構解けたので・・・」

「？結構解けると、アクセサリーをしているの？」

やっぱりバカなんだね・・・アキくん、まあアキくんには無縁の話
だけどさ〜

「そ、それって!?!」

「私たちが勝てるわけないじゃない!」

「じゃ、いきますね」

その言葉と同時に、みーちゃんの召喚獣の腕輪が敵の召喚獣に向け
られる

「ちょっと待つてよ!?!」

「律子!とにかく避けなと!」

大げさなほど大きく横に飛ぶ、まあ、待つてとって待つ人はいな
いと思うんだよね

キュボツ!

「きゃあああーっ!」

「り、律子!」

左腕から放たれた光線は、大きな音と共に敵の召喚獣を一体吹き消
した。

と、そこでアキくんが私以外に聞こえないよう小さな声で

「朔夜、なんで姫路さんの召喚獣だけアクセサリをつけているの
?」

と聞いてきた。私はアキくんにみーちゃんの召喚獣を指さしながら

「いい？アキくん。テストの点数が400点以上とれると特殊能力がつくって教わらなかった？」

『Fクラス 姫路瑞希 VS Bクラス 岩下律子&菊入
真由美

数学 412点 189点 & 1
51点』

「ああ、すっかり僕には無縁の話だから忘れてたよ」

「ですよ〜 アキくんが400点以上とったらそれはもはやアキくんじゃないよね」

「そこまで言う！？」

「だって本当のことじゃん」

アキくんが400点以上・・・ありえなすぎるから！

「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

こんな話をしてる間にみーちゃんは菊入さんにも止めをさしていた。

「なっ！そんな馬鹿な！？」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

Bクラスの残りの人たちは驚愕の表情を隠せない、そりゃそうだろう、みーちゃん一人に二人が簡単に負けてしまったのだからね

「み、皆さん、頑張ってください！」

「やったるでえーっ！」

「姫路さんサイコーッ！」

みーちゃんの指揮官らしくない指示だけど、これは効果絶大だ。こんな可愛い子に頑張つてといわれちゃ頑張らない男子なんてそうそういないと私は確信しているよ！

「みーちゃん、相手の士気も落としたことだし一旦下がってね」
「あ、はい」

けど、みーちゃんが指揮官としてちゃんとした指示をとれそうにな
いんだけど・・・。
あつ、だから私が補佐ね・・・、坂本め、私を使おうだなんて百年
早いんだよ！！つて言いたいところなんだけど、負けるわけにも以
下ないし、ここは頑張ってみるかな

「中堅部隊と入れ替わりながら後退！戦死だけはするな！」

そんな指示がBクラスから聞こえてきた、作戦通りだね

「明久、ワシたは教室に戻るぞ」
「ん？なんで？」

そこに秀吉くんが私たちに近づいてきてそういった、なんで戻る必
要があるのだろう？

「Bクラスの代表じゃが・・・」
「うん」

「あのい根元らしい」
「根元つて、あの根元恭二？」
「うむ」

「私の大嫌いリストのナンバーワンを誇る人だね！」

「朔夜、それは知らないよ、たしかに僕も嫌いだけどさ」

根元恭二とはとにかく評判の悪い男だ。噂ではカンニングの常連で、勝つためには手段を選ばない坂本よりも極悪非道な男だ。

「うーん、Bクラスの代表が根元だったら戻っておいたほうがよさそうだよな」

「雄二に何かがあるとは思えんが、念の為に」

「じゃあ、アキくん。ここはまかせてよ。アキくんと秀吉くんは早くFクラスに戻って」

「ありがとう朔夜」

「うむ、お主も戦死だけはするのじゃないぞ」

そついい残し、アキくんと秀吉くんは数人Fクラスの何人かを引き連れて一度教室に戻っていった。

本当は私が秀吉くんと一緒にいきたかったけど・・・ね

「さて、みーちゃん。絶対にBクラスの教室まで押し込むよ？」

「はい、さくやちゃん。頑張りましょう」

もう一度気合を入れなおし、私とみーちゃん率いる部隊は中堅部隊と入れ替わりがら後退している部隊を追うかのようにBクラスの教室へと進むのであった

第九問（後書き）

ご意見&ご感想お待ちしております

第十話（前書き）

明日休みだあゝ

第十話

今現在私たち部隊はBクラスの教室のドアで交戦していた

「みーちゃん、少しつらいだろうけどここで持ちこたえてね」

「はっ・・・はい、が・・・頑張ります」

まずいな、ここまで来てみーちゃんの体力がなくなりつつある。みーちゃんの体は弱いため当然と言えば当然だけど・・・いまここでみーちゃんに外れてもらおうと一気に形勢逆転されるよね・・・

キーンコーンカーンコーン

「四時になりましたので今日の試召戦争は終了となります。続きは明日この状態から始まります」

急に教師フィールドがなくなり先生がそう言い残し立ち去った

「えっ？どういうことだろ？」

「よ、よくわからないけど、た・・・助かりました」

「大丈夫みーちゃん？」

その場に座り込むみーちゃんに私は問いかけた

「うん・・・、とりあえず坂本に聞かなくちゃいけないしFクラスに戻るうか？」

「あっ・・・はい、さくやちゃん」

私たちの部隊がFクラスに帰ろうと廊下を歩いているとそこには

「……アキ（吉井）くん？」

そこには誰かに散々殴られた後に廊下に頭を叩きつけられたような怪我をしているアキくんがいた

「まっ、仕方ないな……この死体のような部隊長さんを運んで
『了解！』」

流石に私一人じゃ運べないため部隊の男子に運ばせることにした、
にしてもどうしたんだろう？

「坂本、一応教室前に攻め込んだんだけどどういこと？」

「ん、よくやったな。Bクラスと四時までで決着がつかなかったら
戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試
召戦争に関わる一切の行為を禁止する。という協定を結んでな」

「どうして？体力勝負な……そっか、みーちゃんが駄目なのか
「そういうことだ」

みーちゃんが主力なのだからみーちゃんの体力を考えて万全の体勢
にするってとこか……

ただ、あの根元が何も考えずにそんな提案をしてくるなんて思えな
いんだよね……。

「……同じはどう？」

一人でそんなことを考えているとアキくんが目を覚ました

「あつ、気が付いたアキくん？」

「心配しましたよ？吉井君ってば、まるで誰かに散々殴られた後に頭から廊下に叩きつけられたような怪我をして倒れているんですから」

「いくら試召『戦争』じゃからといって、本当に怪我をする必要はないんじゃないぞ？」

ていうか、普通はこんな怪我をしないはずなだけけど？

「ちょっと色々あつてね。それで試召戦争はどうなったの？」

色々あると殴られ廊下に頭を叩きつけられるのか・・・

「今は協定どおり休戦中じゃ。続きは明日になる」

「戦況は？」

「一応作戦通りに教室前までは攻め込んできたよ」

「もつとも、こちらの被害も少なくはないがな」

坂本が被害を書いたメモを読み上げる。予想内の被害だけどころかなり大きい被害状況だ

「ハプニングはあつたけど、今のところ順調ってわけだね」

「まあな」

「・・・(トントン)」

「お、ムツッリーニか。何か変わったことはあつたか？」

いつのまにか坂本のそばに土屋くんがいた、そういえば土屋くんは今日情報係だったっけ

「ん？Cクラスの様子が怪しいだど？」

「……（コクリ）」

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

「私たちが勝つなんてはなっから思ってたないってことだね」

「雄二、どうするの？」

「んー、そうだなー」

坂本は時計を見る。四時半。まだそんなに遅い時間でもない。

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラス使って攻め込ませるぞ、とか言っただけでやれば俺たちに攻め込む気もなくなるだろう」

ん……、待てよ？Bクラスは四時以降試召戦争に関しての行為を一切禁じるって来た……

「よし。それじゃ今から入ってくるか」

「そうだね」

そしてCクラスに怪しい動き、漁夫の利されるわけにもいかないから協定を結びに行く……

Cクラスの代表は……もしかしてっ!？

「坂本　　ってあれ？坂本たちわ？」

「うむ、お主が一人で考え事をしてる間にCクラスへ行ったのじゃ、万が一を考えてワシとお主はお留守番じゃ」

「なっ!？あの馬鹿……、先走りすぎだよ」

「うむ？どういふことじゃ？」

「四時以降の試召戦争に関する行為を一切禁じるってことは協定も……坂本たちが危ない!」

「どづいつことじゃ!?!」

「Bクラスの代表の彼女がCクラスの代表なんだよ!」
「なんと!?!」

つまり、私が考えるにCクラスに協定を結び行ったらBクラスの代表がいてこちらが先に協定をやぶったからと言い坂本を倒しに来るに違いない……

「……まっ、あのメンバーだしね、大丈夫でしょ」

私は信じてるよ……こんなところで討ち取られるはずないって

その数分後。坂本、みーちゃん、土屋くんが帰ってきた

「お疲れ様」

「朔夜、お前はこのことを分かっていたか?」

「あはは、なんのことでしょ?」

「イエスカノーで答えろ」

「イエス」

「歯食いしばれ!」

ひどい、こんなか弱き女子に暴力を振るう気なの!?

「ていうか、言う前に出てったのはそつちでしょ!」

「まあ、そつだが」

案外すんなり認めただけど……、予想外だった

「そういえば、アキくんわ？」

「ああ、明久と島田は今Bクラスと戦っている」

「それは大丈夫なのかう？」

そりゃそうだ、なんせバカなアキくんだし・・・Bクラスとの点数差なんてひどいものだろう

「大丈夫だ、あのバカも、伊達に《観察処分者》なんて呼ばれてない」

数十分後、アキくと美波ちゃんが帰ってきた

「あー、疲れたー」

「よ、吉井君！無事だったんですね！」

「うん。このくらいなんといだあっ！」

「ふんっ」

「し、島田さん。僕が何か悪いことでも」

「（キッ！）」

「あ。い、いや。美波」

「随分仲良くなったんだね二人とも」

「え？コレで？」

前に比べて名前呼び合ってるし、結構仲良くなってると思うんだけど

「お。戻ったか。お疲れさん」

「無事じゃったようじゃな」

「ん。ただいま」

秀吉さんと坂本もこちらにやってきた

「さて、お前ら

「なに坂本？」

その場に残る全員を見回して坂本がこう告げた

「こうなつた以上Cクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、正直Bクラス戦の後にCクラス戦はきつい」

「そりゃそうでしょ、向こうは私たちのクラスより上のクラスなんだし」

「それならどうしようか？このままじゃ勝ってもCクラスの餌食だよ？」

「そうじゃな・・・」

「心配するな」

「なにか策があるって顔だね坂本」

「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

どんな作戦かわからないけど、絶対に秀吉くんを使う作戦だろう、だから秀吉くんをCクラスに連れて行かなかつたんだと思うし・・・。

まあ、明日に期待して、今日は解散となった

第十話（後書き）

ご意見&ご感想お待ちしております

第十一問（前書き）

正直この小説はみなさんに読まれているのだろうか・・・

第十一問

「昨日言っていた作戦を実行する」

試召戦争2日目、登校した私たちFクラスのメンバーに坂本は開口一番そう告げた

「作戦？でも、開戦時刻はまだだよ？」

「アキくん馬鹿だね・・・、BクラスじゃなくてCクラスの方でしょ？」

「朔夜は頭の回転が速くて正直助かる」

「あ、なるほど。それで何をすんの？」

「秀吉にコイツを着てもらおう」

そう言いながら坂本が取り出したものは・・・私たちの学校の女子の制服？

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

「秀吉くん、そこは構おうよ。それにしても坂本はなんでもそんなものを持つてるの？」

「企業秘密だ」

「なんだそれ!？」

企業秘密ってなによ企業秘密って!これは探るしかないね

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

ああ、だから秀吉くんをCクラスに連れていかなかったんだ
木下優子とは、Aクラス所属の秀吉くんの双子のお姉さんである、

正直見分けがつかないんだけどね

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ……」

坂本から制服を受け取りその場で着替えを始める秀吉くん

「秀吉くん……、とりあえずここで着替えるんじゃないかとどこかトイレとかで着替えてきてくれるかな？」

「うむ、たしかにそうじゃな。ここには女子もいることじゃし」

そう言い残し秀吉くんは教室を出た

「朔夜！なんてこといつてくれるのさ！」

つと、よく見るとFクラスの男子（坂本を除く）が私の方をじっとみていた

やめるよ……照れるじゃん

「で、なにが？」

「だから、せつかく秀吉の生着替えが見れると思ったのに！」

ああ、つまり女子みたいな外見の秀吉くんの生着替えが見たかったと

「ごめん〜」

「絶対悪気ないだろ！」

当然そんなものあるはずがない！

『木下の生着替えをどうしてくれるんだ』

『ふざけるな!』

『総員、攻撃態勢! 女子だからといって手加無しだ! 木下の生着替えを邪魔したやつは徹底的に痛い目にあわせてやれ!』

『『『おう!』!』』』

「おい、やめておけ」

そこに坂本が忠告をするのだが・・・

『総員、突撃ー!』

「ああ、喧嘩を挑んでくるとは・・・、地獄を見せてやる」

「待たせたの、着替えてきたのじゃ・・・って、どうしたのじゃいっ
つたい?」

着替えを終えた秀吉くんが戻ってきていきなりそんなことを言い出
した

「見ての通り、皆睡眠不足で寝ちやってるよ」

そこには、寝ている(?) Fクラスの男子生徒がごろごろと転がっ
ていた

「忠告を聞かないからだな・・・、まあいい。Cクラスに行くぞ」
「うむ」

「あつ、私もついていく」

「あ、僕も行くよ」

幸いなことに、みーちゃんや美波ちゃんがいなくてよかったと思う
ちなみにアキくんは私の実力を知ってるため戦いには参加してこ
な
かった

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉」
「気が進まんのか・・・」

あまり乗り気ではない秀吉くん、そりゃそうだ。実の姉のふりをし
て敵を騙すなんて決して気持ちの良いことではないだろう

「そこを何とか頼む」

「むう・・・。仕方ないのか・・・」

「悪いな。とにかくあいつらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くよ
う仕向けてくれ。お前ならできるはずだ」

秀吉くんは演劇部のホープにして声真似が得意というすごい子だ

「はあ・・・。あまり期待はせんでくれよ・・・」

ため息をつきながらCクラスへと向かっていく秀吉くん

「雄二、秀吉は大丈夫なの？別の作戦を考えておいたほうが・・・」

「多分大丈夫だろう」

「すごい自信だね坂本？」

「シッ。秀吉が教室に入るぞ」

坂本が口に指を当てる。

ガラガラガラ、と秀吉くんがCクラスの教室の扉を開ける音が聞こ
えてきた

『静かにしなさい、この薄汚い豚ども!』

・・・へっ?

「流石だな、秀吉」

「うん。これ以上はない挑発だね・・・」

「あれ・・・は、ゆうちゃんの真似をしてるんだよ・・・ね?」

ゆうちゃんってあんなキャラだったけかな・・・?

『な、何よアンタ』

これはCクラスの代表、小山さんの声だろうか?

『話しかけないで!豚くさいわ!』

おいおい、自分から話しかけといて話しかけないでって・・・

『アンタ、Aクラスの木下ね?ちょっと点数良いからっていい気になってるんじゃないわよ!何の用よ!』

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校舎にあるなんて我慢ならないの!貴方達なんて豚小屋で十分だわ!』

正直、Cクラスが臭くて醜い教室が同じ校舎にって言うのならDクラスはどんな罵倒をされるんだろう・・・

『なっ!言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって!?!』

小山さんにとってはFクラスの設備は豚小屋とイコールなんだね・・・

『手が穢れてしまうから本当は嫌なんだけど、特別に今回は貴方達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの』

負けてもDクラス設備にしなければならないけどね

『ちょうど試召戦争の準備もしてるようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴方達を始末してあげるから!』

そうCクラスに言い残し秀吉くんは教室を出てきた

「これで良かったかのう？」

どこかすつきりした顔で秀吉くんが私たちに近寄ってくる

「ああ。素晴らしい仕事だった」

「ゆうちゃんってそんなこと言うような子だったけ？」

「関根は姉上のことを知っておるのかのう？」

「あつ、うん。去年一緒のクラスだったし」

そつえば翔子ちゃんとも一緒のクラスだったから私って存在が忘れられてるのかな？

『Fクラスなんて相手にしてられないわ! Aクラス戦の準備を始めるわよ!』

Cクラスから小山さんのヒステリックな叫びが聞こえてきた

「作戦もうまくいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始める

ぞ

「あ、うん」

「そういえば、私が寝かせて（？）あげたあの子達は起きてるかな？」

「・・・どうだろうな」

えっ、そこまで強くやってないはずだから起きてると思うんだけど
な・・・

そんなことを考えつつ、後十分で始まるBクラス戦の準備をするため私たちは急ぎ足でFクラスに戻っていった。

・・・起きてますように

第十一問（後書き）

ご意見ご感想などお待ちしております

第十二問（前書き）

久しぶりの更新だね．．．

第十二問

「ドアと壁をうまく使うんじゃない！戦線を拡大させるでないぞ！」

只今Bクラス戦開始から少したったBクラスの教室前
坂本の作戦『敵を教室内に閉じ込める』を実行している真つ最中な
んだけど……

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！補給も念入りに行え！」

本来はみーちゃんが総司令官として指示をだすはずなんだけど、今日の様子がおかしい
みーちゃんが、一向に指示を出そうとしない……どうしたんだろう？

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！援軍を頼む！」

古典というと竹中先生だね、Bクラスは文系が多いって聞いているし……

「姫路さん、左側に援護を！」

アキくんからみーちゃんへ援護要請がくるのだが……

「あ、そ、そのっ……！」

肝心なみーちゃんが泣きそうな顔をしてオロオロしている

「アキくん……って竹中先生に言ってきた」
「朔夜？……了解！」

アキくんが竹中先生に近づいて耳元で一言

「……ツラ、ずれてますよ」

「っ！！少々席を外します！」

頭を押さえて走り去った竹中先生、まさかこんなところで役に立つなんて

「ありがとう朔夜、正直危なかったよ」

「いえいえ、勝つためだからね それにしても……」

「あつ、やっぱり朔夜も思った？姫路さんの様子がおかしいよね？」

やっぱりアキくんも気づいていたみたいだ……、それにしてもどうしちやっただらうか？

「姫路さん、どうかしたの？」

アキくんがみーちゃんに近づき尋ねた。たしかに様子がおかしいし、原因がわからないことには身動きがとれないからね、どうしちやっただらうか？

「そ、その、なんでもないですっ」

「そうは見えないよ。何かあったなら話してくれないかな。それ次第で作戦も大きく変わるだらうし」

「ほ、本当になんでもないんです！」

首を大きく横にふるみーちゃん、泣きそうな顔は相変わらず、絶対

なにかある・・・

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

なっ、たしか右側出入り口はたしか数学だったはず！？

「数学の教師はどうしたの！？」

「Bクラス内に拉致された模様！」

右側までBクラスの得意な文系にされるなんて・・・

「私が行きますっ！」

みーちゃんが戦線に加わろうと駆け出そうとした瞬間

「あ・・・」

急に戦線へ向かおうとしていた足が止まってしまった。

何かをみて動けなくなっただけがしたんだけど、なにをみたんだろう、そう思いみーちゃんが見た方向を見てみるとその先には窓際で腕を組んでこちらを見下す卑怯者　　根元の姿があった。

ここからでは少し見えにくいんだが、手には確かに封筒をもっていた・・・、それもあの封筒は・・・。

「・・・なるほどね、さすが根元っていったところだよ」

昨日の協定はおかしいと思ったんだ、自分が不利になる協定なんて根元がするはずないと思ったんだけど、昨日教室を荒らしたときに見つけた・・・ってとこかな。みーちゃんを封じることができる物を

「姫路さん」

「は、はい……?」

アキくんがみーちゃんを呼び

「具合が悪そうだからあまり戦線には加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気をつけてもらわないと」

「……はい」

「じゃ、僕は用があるから行くね」

「あ……!」

なるほど、アキくんに見られて誤解されたってみーちゃんが言った、アキくんも気がついたってことか

「面白いことしてくれるじゃないか、根本君」

「やっぱり気がついてたんだね、アキくん」

「朔夜? どうして?」

「あの封筒あげたのは私だからね……、根元潰すぞ」

異様な雰囲気をまとい始めた私にアキくんがビクツと反応した、いつものアキくんならここで黙ったり距離をとるのだが今日は、一歩も引かずに一言

「当然だっ!」

くFクラスく

「雄二(坂本)っ!」

「うん？どうした明久と朔夜。脱走か？チヨキでシバくぞ」

「話があるんだ」

「・・・とりあえず、聞こうか」

坂本のジョークにかまってる暇はない、坂本もそれを察したのか真面目な顔つきになった

「根元君の着ている制服が欲しいんだ」

「・・・お前になにがあつたんだ？」

やっぱり馬鹿だねアキくんって・・・、それじゃ男に興味がある人みたいじゃん

「私に面白い考えがあるんだ」

「・・・ほう。まあいいだろう。勝利の暁にはそれくらなんとかしてやるう」

「うん、楽しみにしといてよ」

あいつをこの学園で過ごせないようにしてやるうじゃなか・・・

「で、それだけか？」

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

「理由は？」

「理由は言えない」

これはアキくんがみーちゃんが坂本にラブレターを書いてると思ってるらしく、本当はアキくんあてなんだけど・・・私が口にするもじゃないと思っし

「どうしても外さないとダメなのか？」

「うん。どうしても」

坂本が顎に手を当てて考える、そりゃBクラスに勝つにはみーちゃんが必要だからね

「頼む、雄二！」

「私からもお願い、さかも・・・いや、代表！」

「・・・条件がある」

「条件？」

「一体どんな条件を言ってくるんだろう？」

「姫路が担う予定だった役割をお前がやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させる」

「もちろんやってみせる！絶対に成功させるさ！」

「良い返事だ」

「それで、僕は何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根元に攻撃を仕掛ける。科目はなんでもいい」

「皆のフォローは？」

「ない。しかも、Bクラス教室の出入り口は今の状態のままだ」

「・・・ずいぶんと難しいことをアキくん頼むんだね」

Bクラス教室の出入り口が今の状態だと、それこそみーちゃんみたいな圧倒的な個人の火力が必要になるためみーちゃんはこの作戦の要なんだけど、それをみーちゃんなしで・・・。

「もし、失敗したら？」

「失敗するな。必ず成功させる」

この口ぶりからして失敗したら敗北・・・って感じかな

「それじゃ、うまくやれよ」

「え？どこか行くの？」

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな」

Dクラス？・・・ああ、そういえば、教室の設備を交換せずに作戦に役立てるとか言ってたな

「明久」

教室をでる直前に坂本は足を止め、アキくん

「確かに点数は低いが、秀吉やムツリー二のように、お前にも秀でている部分がある。だから俺はお前を信頼している」

「・・・雄二」

「うまくやれ。計画に変更はない」

そう言い残し、坂本は教室を後にした

「あつ、ちょっと待った」

私も教室から出て坂本を追った

「ん？どうした朔夜？」

まだ近くにいてよかったよかった、すぐに追いついた

「あのいいようじゃ、私には秀でている部分がないって聞こえるんだけど？」

「そんなことか？お前は本気出さないしな」

「・・・そのことなんだけど、今回私は本気を出す」

「っ！？本当になにがあつたんだ？」

「言えないっていつてるでしょ！」

いや、別に言ってもいい気がするけどアキくんが頑張ってるし私も頑張りたいからさ・・・

「・・・いいだろう、どうせ翔子とかはお前の実力を知ってるだろう」

「うん ありがとう坂本」

「礼はいらない。お前が本気を出してくれるのならこちらが有利になるだけだ、頑張れよ」

そういい残し坂本はDクラスへと出向いていった
私が教室に戻るとアキくんたちはもういない

「あれ、アキくんたちはどこにいったの？」

そこらへんの男子に尋ねると

「ああ、あいつらならDクラスに行ったぞ？」

Dクラス・・・なるほどねえ・・・、アキくんにはかできない大役なわけだ

「さて、科目は・・・、英語かな。アキくんなら遠藤先生を使うはず」

遠藤先生は少しのことは寛容で見逃してくれるしね

「さて……、補給補給と〜」

久しぶりにこんな頑張ろうと思ったよ……

「せ……関根？……手が見えないほど早く動いてるぞ？」

さあ、パーティーを始めようじゃないかっ！！

第十二問（後書き）

久々の更新だ〜

最近パソコンをいじってなかったからね〜

感想などお待ちしております〜

第十三問

現在、三時になる10分ほど前

「おっ、アキくんたちみっけ」

「あっ、朔夜、どうしてここに？」

「いいじゃん、私も見たいなと思って」

Dクラスにいるアキくんたちと合流した私は今から始まる作戦を見届けることにした

「二人とも、本当にやるんですか？」

「はい。もちろんです」

「このバカとは一度決着をつけなきゃいけないかったです」

今から戦いを始めるのはアキくと美波ちゃんだ

「でも、それならDクラスでやらなくても良いんじゃないですか？」

「先生、それは無理ですよ？アキくんは《観察処分者》ですから、Fクラスみたいなオンボロ教室じゃ教室がアレ以上にひどい状況に変わっちゃいます」

「もう一度考え直しては」

「いえ。やりませぬ。彼女には日頃の礼をしないと気が済みませぬ」

何度も考え直すように説得する遠藤先生に、有無を言わせぬ口調で言い切るアキくん

「わかりました。お互いを知る為に喧嘩をするというのも、

教育としては重要かもしれませんがね」

そういうと遠藤先生は二人から距離を取って教師フィールドを張る

「「サモン試獣召喚っ！」」

おなじみの小さな召喚獣が魔方陣から現れる、美波ちゃんはサーベルかな？アキくんは・・・木刀つと

「行けっ！」

殴ろうとアキくんの召喚獣が美波ちゃんの召喚獣に向かって走り出す

「ぐ　　うっ！」

しかし、簡単に美波ちゃんに避けられ壁に拳をぶつけるアキくんの召喚獣、そのフィールドバックで拳を傷めるアキくんがいた

「　　んのおっ！」

大きなモーションから一撃を美波ちゃんの召喚獣に放つ。

「つう・・・っ！」

横に飛ばれてかわされ、さっきと同じところの壁にぶつかった

「アキ、時間がないわよ」

美波ちゃんの言うとおり現在時刻午後二時五十七分。作戦まであと三分までせまってきていた

『お前らいい加減諦めるよね。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての』

遠くからあのBクラス代表の根元の声が聞こえてきた

『どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？』

このム力つく挑発をする聞きなれた声は坂本の声、みーちゃんが戦闘に加われないため、坂本が率いる本隊までも出動させないといけない状況になってしまったんだろう

「らあっ！」

アキくんに学習能力がないかのような大振りの攻撃は美波ちゃんには当たらない。

『はア？ギブアップするのはそっちだろう？』

『無用な心配だな』

『そうか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

『・・・お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ』

『けっ！口だけは達者だな。負け組代表さんよあ』

『負け組？それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな』

「はああっ！」

四度目の攻撃、これも華麗によけられる。

何度も何度も壁に拳をぶつけているせいで拳から血が出始めている

『……さつきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっているのか?』

『さあな。人望のないお前に対して嫌がらせじゃないのか?』

『けつ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ!』

『……体勢を立て直す!一旦下がるぞ!』

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか!』

「アキ、そろそろよ」

「アキくん、早く!もう午後二時五十九分!」

「うん。わかってるよ」

アキくんが目配せし、他の皆は黙ってうなづく。

「吉井君、島田さん。二人とも何をしようとしているのですか?」

まだ状況を飲み込めていない遠藤先生はアキくんと美波ちゃんを交互に見る。

「おおおおおっ!」

アキくんの召喚獣がこれまでの攻撃より大きく力をいれ、大きく拳を振りかぶる

『あとは任せたぞ、明久』

敵の本隊を引き付けた坂本が、壁の向こう側からよく通る声でそう告げた。

現在の時刻、午後三時ジャスト。作戦開始！

「だああーっしやあーっ！」

アキくんの召喚獣がもてる力をすべて注ぎ込んで壁に攻撃する。ハナっから目的はBクラスにつながる壁なのだ。美波ちゃんとの勝負はアキくんが壁を破壊する召喚獣を呼び出す為の方便に過ぎないというわけ

「ぐううう！」

アキくんがこれまでにないうなり声を上げた、拳の先は先ほどまでよりもひどい出欠をしていた・・・が

「アキくん・・・、よく頑張ったね」

ドゴオッ

豪快な音をたて、Bクラスにつながる道が生まれた瞬間だった。

「ンなっ!?!」

崩れ去った壁の向こうに驚いて引きつった根元の汚い顔がある。

向こうの戦力のほとんどが坂本を討ち取るためにで計らっている、根元の守備は薄いということは・・・またとないチャンスだよ！

「くたばれ、根元恭二いーっ！」

私たちは呆気に取られている根元に勝負を挑むために駆け寄った。

「遠藤先生！Fクラス島田が」

「Bクラス山本が受けます！試験召喚！」

「くっ！近衛部隊か！」

まだ教室に残っていた根元の近衛部隊がその行く手をふさいできた

「は、ははっ！驚かせやがって！残念だったな！お前らの紀州は失敗だ！」

失敗？なんのことをいってるのだろうこの代表は？

「みんな下がって？Fクラス関根朔夜が行きます！試験召喚！」

私の召喚獣が山本さんの召喚獣をなぎ払う

「戦死者は補習！」

そこに鉄人が現れ山本さんは鉄人によってつれてかれた

「は、はっ？」

そう一撃でなぎ払ったということだ・・・。

ダン、ダンッ！

突如現れた生徒と教師、二人分の着地音が響き渡る。

エアコンが止まった涼を求む為に開けた窓からロープを使って飛び込んできた保険体育教師と土屋くん・・・だがっ！

「土屋くん・・・、ここは私がもらっよ」

「・・・・・・・・（コクッ）」

土屋くんには悪いけどここは譲ってもらっよ、なんせ今の私は・・・

「Fクラス、関根朔夜、Bクラス根元恭二に英語勝負を挑みます」

『Fクラス 関根朔夜 VS Bクラス 根元恭二』

英語 683点 189点 『

「大事な親友の心をもて遊びやがって、腹がたってるんだよっ！！」

一気に根元の召喚獣との距離を詰め、トンファーで殴りつけた

「み、認めないぞ、お、俺がFクラスなんかにいー！！」

今ここにBクラス戦が終結した

第十三問（後書き）

遠藤先生って英語Wなのかよく分からないので英語で

とつとつ本気を出した朔夜の点数、高橋女史に匹敵する強さ!？

ご感想などお待ちしております

第十四問（前書き）

ひどいよね……。

テストの結果が悪かったからってPCCヶ月禁止なんてえー（<|>）

第十四問

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……」

床に座り込んでいる根元。さっきまでの強気が嘘のようにおとなしすぎる

「さて、朔夜。ここからはお前がやるんだろう？」

坂本がこちらを向いてそういつてきた。

そういえば任せてとかいつちやっただけ。

「了解、楽しく調理してみせるから」

私は一步前にでて根元を見下す目でにらみつける

「本来ならさ、設備を明け渡してもらって素敵なFクラスの卓袱台をプレゼントフォーユーすることんだけどさ、条件によっては特別に免除してあげてもいいんだけどなあ」

Fクラスの面々がざわめき始めた。

そりゃそうだ、せっかく勝ってBクラスの設備が手に入るのにそれをやめると言ってるんだからね。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺たちの目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

つとここで坂本が弁明してくれた

「うむ。確かにのう」

「そういうこと、だからBクラスが条件を呑めば開放してあげようかなって」

「・・・一つ聞いていいか」

「黙れ下衆が！！てめえに拒否権はないんだよっ！！」

「・・・（おーい朔夜、昔の顔と口調にもどってるぞ）」

「・・・っコホン。と、とりあえず、そういうことなの！」

うう・・・なんかみーちゃんのこととかでムカついてたら昔みたくなっちゃった・・・。

「・・・条件はなんだ」

抵抗する力なく根元が私に問う

「それは根元。あなただよ？」

「俺、だと？」

「うん。正直去年からうざかったし、今回の戦争でひどいことをしてくれちゃったりしたもんね・・・。」

私はそういいながら根元をさらにらみつけると根元は気迫に負けたのだろうかそっぽを向いてしまった
あれ？私ってそんなに怖いのかな？

「っと、いうことでBクラスの皆さんに特別チャンスを与えましょ
う」

坂本にアイコンタクトを送って用意を急がせてっど……

「Aクラスに試召戦争の準備ができていると宣言してくれるかな。そうすれば設備については見逃してあげてもいいよ。ただし、宣戦布告じゃないからね？あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えてね〜」

「……それだけでいいのか？」

疑うような根元の視線。

……って、視線をこっちに向けるな、気持ち悪いから！

「うん。Bクラスの代表がコレを着てさっきいった通りに行動してくれたら見逃してあげる」

そういつて坂本に用意を急がせた女子の制服。

「ば、馬鹿なことを言うな！この俺がふざけたことを……！」

根元が慌てふためく。そりゃ嫌だろっけど……。
実に楽しい光景だよね……。はっ、また私は昔みたいに。

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守るなら、やらない手はないな！』

Bクラスの仲間たちからの温かい声援が飛び交った。

根元ってここまで嫌われてたんだね……。まっ、どうでもいいけど。

「んじゃ、決定だよな」

「くっ！よ、寄るな！変体ぐふう！」

「とりあえず黙らせました」

「あ、ありがとう」

まさか一瞬にして代表の鳩尾にクリーンヒットを叩き込むなんて流石だよ。

「じゃあ、着付けに移るとしよつかあ、アキくん、手伝ってくれるかな？」

「了解」

ぐったりと倒れている根元に近付き制服を脱がせる・・・もちろんアキくんが。

私？私はこんな変態を触りたくないからね

「う、うう・・・」

「もう一発っ」と

うめき声が聞こえたので今度私が深く鳩尾に素早くいれておきました

「これを先に次がコレで」

アキくんに順序を教えつつ根元を着付けていく。

「・・・可愛くない！」

着付けし終わった瞬間に私がつばやいた一言である。

「うん。まさかここまで可愛くないとわね・・・」

「んじゃ、坂本、後のことは頼んだよ？」

「おう、まかせておけ」

坂本とFクラスの数人は根元が逃げ出さないようにAクラス近くまで連行していった。

「さてと・・・」

私は一人で廊下にでて根元の制服をあさる。

「・・・おっ、みつけみつけ」

見覚えしかない封筒を取り出し、制服をゴミ箱に捨て私のミッション達成

さて、これをアキくん・・・っと、いたいた

「アキくんアキくん、はいコレ」

「・・・ん？これは・・・姫路さんの手紙？」

「そう。アキくんが返しといてね」

「え、えっ！？なんで僕が？朔夜が返しておけばいいじゃないか」

むっ・・・昔とかわらず鈍感なんだよねアキくんって。

「いいから、恥ずかしかったらみーちゃんの鞆の中に入れておいてあげて」

「うん・・・、わかったよ」

そっぴい残すとアキくんはFクラスに向かい走り出した。

えつと、次はみーちゃんつと・・・

「みーちゃん」

「ふえ！？さ、さくやちゃん。もう、いきなりだったからビックリしちゃったじゃないですか」

「あははは・・・ごめんごめん。それよりさ、あの手紙ちゃんとアキくんに渡したの？」

「えつ？・・・それが、その・・・、根元君に・・・」

「そういえば、根元も私があげたような封筒もってたんだよね」

「・・・さくやちゃん？」

「たしかそれは根元の制服に入ってたような気がするんだよね」

わざとらしく口にする

「さくやちゃん・・・、それであんなことをして取り返してくれたんですね？」

「なんのこと？私はただアキくんがなにかに気がついてやる気になつてたから手伝ってあげただけだから」

「えつ・・・？吉井君がですか？」

「そういえば、さつき封筒をもったアキくんが教室に戻るところをみたんだよね」

「・・・ありがとう、さくやちゃん」

そういい残すとみーちゃんはFクラスの教室へと向かった。

ふああ、眠い・・・。私はもうやることもやっただし帰っても大丈夫かな？

てか帰る。帰って早く寝よう。なんか疲れたしね・・・。

・・・下校しようとした時に廊下から

『こ、この服、ヤケにスカートが短いぞ！』

『いいからキリキリ歩け』

『さ、坂本、それに関根！よくも俺にこんなことを

『無駄口を叩くな！これかれから撮影会もあるから時間が無いんだぞ！』

『き、聞いてないぞ！』

あの会話は笑いを耐えるのに必死だったよ。

第十四問（後書き）

ええっと、久しぶりすぎる更新ですかね、はい。

久しぶりすぎて前の書き方と変わってたりしないでしょうか（汗

自分じゃ気づかなくてすみませんm（|（|（m

ご感想& a m p . . .ご意見などいろいろとお待ちしております

閑話 修羅と悪鬼羅刹と運命の人（前書き）

なんかBクラス戦も終わったことですし、そうだ！京都へ行こう的なノリで閑話をかいてみました

閑話 修羅と悪鬼羅刹と運命の人

「ひ、秀吉くん、ちよつといいかな？」

「うむ、なんじゃ関根？」

「えつと、できれば関根じゃなくて名前で呼んでもらいたいななんて・・・じゃなくてっ！はいコレ」

「これは・・・お弁当かのう？」

「ははっ、お弁当箱を渡してるのにこれがお弁当じゃなかったらビツクリだよ」

「それもそうじゃのう。それにしても急にどうしたのじゃ？」

「えつと・・・それは、ほら、・・・」ゴニョゴニョ

「急に顔を赤くしてどうしたのじゃ？」

「べ、別に！！」

中学校一年生

当時の私は・・・荒れてた？

アキくんのおかげで明るくなっただし喧嘩も強くなった、それになにより学校の友達が増えたのが一番の喜びだった

・・・けど、それを良く思わない男子って結構いてさ、女なのに自分達より喧嘩が強いのが嫌だったらしい。

それを理由に男子からのいじめはなくなっていなかった。

まあ、さ。あんまり相手にしてなかったけど、手を出されたら逆にやり返して泣かせてやったりしていた。

それが効いたのか私へのいじめはいつの間にかなくなっていた・・・

いや、私へのいじめはなくなっただけでなくなっていなかった。けそいつらは私には勝てないと思っただらうね、・・・今度はアキくんをいじめていた。

理由は簡単、私と一番仲が良くて、私の大切な友達だから。

私が嫌いなのに私に勝てないから、一番仲が良い友達を傷つけた。

アキくんはそれを否定してたけどね、私はいじめられるところを目撃しちやっただよね。

あいつらは本当に最低だった。だから私はそいつらを殴った。もうフルボッコだよ。

・・・それが暴力事件として扱われた。私が殴った奴が先生にばらしたんだって。

先生に「私はこいつらに殴られたり物を奪われたりなどいじめを受けてたんですよ!？」と言っても無駄だった。私だけが一ヶ月の謹慎を受けた。

理由は、「こんな優秀な生徒がいじめをするわけない」だった。たしかに勉強なんてしないで授業中は寝てすごしてる私よりかは成績優秀の授業をまじめに受けてる子のほうを信用するんだらうけどさ・・・。

謹慎明け、私は前と変わってしまった。

「おはよう、朔夜。ようやく謹慎が解けたんだね」

「・・・ん？ああ・・・アキくんか・・・」

「ど、どうしたの朔夜？」

「・・・悪いけど私にかまわないでくれる？」

「えっ・・・ま、待って朔夜!」

「・・・うっとうしいんだよ」

「っ・・・!!」

殴った。自分でもすぐ後悔した・・・がこれで良いと思った。
こうして一番の仲の良かった友達を突き放した。
これが中一の夏の出来事

ここから非行少女？

学校には行かないで喧嘩ばかりしてた。

裏の世界で「修羅の朔夜」と呼ばれるほど荒れに荒れていた。

中一の夏、あいつに出会ったのはこのときだ。

私はいつものように学校をサボり、狭い通りに居座っていた
この狭い通りは非行に走ってるやつや、暴力団などにはいつてる
やつらが多く通る。だから私はここにいる。

なんでかって？そりゃもちろんここにいれば喧嘩がいつでもできる
からね。

そんなある日一人の男がやってきた。

「おい、邪魔だ。どけよ」

「ん？へえ・・・これはこれは、悪鬼羅刹さんがどういったご用
件で？」

そこに立っていたのは悪鬼羅刹と謳われこの地域で一番恐れられて
いた男が立っていた。

「ほう、悪鬼羅刹と知っても退く気はないようだな」

「はっ、ここは私の縄張りだよ？退くわけないじゃんよ」

「・・・泣いても知らないぞ」

「はっ！逆に泣かせてやるよ！！」

「・・・（ガンのくれ合い）」

「一つだけ聞いておく、おまえの名わ？」

「悪鬼羅刹なんかに教える通り名はないけどね・・・、一応「修羅」って呼ばれてるよっ！」

こうして喧嘩は始まった、激しい攻防戦が繰り広げられた。

・・・が、まあ、結果は勝てるはずないよね。

私は女子で相手は男子、体格差や力、身長差その他もろもろ勝てるわけがない、それもこの地域で一番恐れられているほどの実力者をもつやつなんかには挑むなんてさ。

私の武器のスピードすらあいつには見切られていた。

「けっ、まあ、たいしたもんだった。じゃあな」

私は始めて敗北を味わった。それも目立つ外傷が無いように顔などは殴らずに戦っていた。それが一番悔しかった。

それから私はもっともともと強くなるうと考えた。

これが中二の夏

そして中三の夏。

またいつものように過ごす毎日であったがこの日は違っていた。

そう、8月31日、中学校最後の夏休み、この日、私は自分を変えたいと初めて考えるようになった。

「よう、まだここに居座ってるんだな」

後ろからしたその声は去年私に初の敗北を味わわせた男による声だった

「悪鬼羅刹か・・・、どうした？またここを通りたいんなら私を倒してから行きなよ」

「はあ？まだこりてねえのかよ」

「ふん、去年の私と思ったら大間違いだからね！去年の恨み返させてもらおうよ」

「っ！？あぶねえじゃねーか！」

「ちっ、避けるのかよ、去年より早くなってるはずなんだけどな」「だろっな、ぎりぎりかわせた・・・って感じだったからな！」

悪鬼羅刹も本気になったらしく容赦なく殴りかかってきた。
バキッ！

私はこの瞬間、「あっ、どっかの骨が逝ったな」と感じた、が、ここで退いたら去年と同じ思いををすると思っただらうね。

「そりゃどうも、お褒めの言葉をありがとうっ！」

ドスッ！

「っ・・・！」

完璧に鳩尾をとらえた感触があった。

「・・・ちったあやるようになったみたいじゃねーかっ！」

「そりゃどうもー！」

こうして殴り合いは続いた。

ふと気がつくと病院にいた。

「・・・悪鬼羅刹ー！」

飛び起き部屋を見渡すと悪鬼羅刹の姿は何処にもいないが、可愛い少女がいた。

「ようやく起きたようじゃのう」

「ここは・・・？てか、悪鬼羅刹はどうした!？」

「むう？おぬしは路上で倒れているところをワシが見つけて酷い怪我をしておったのでのう、病院に連れてきたのじゃ。骨が何本か折れてたらしいのじゃが、命に別状はないらしいぞい」

この可愛い少女は一体なんなんだろう？
はっ・・・うん。そっか。

「そっか・・・、私、天国に来たんだね」

「なぜそうなるのじゃ!？」

「だって目の前に男子の制服を着た美少女がみえるなんて・・・」

「ワシは男じゃ!！」

・・・へっ？男？

「えっ・・・とお、男の娘？」

「男の娘ではないのじゃ!！ワシはただ外見が女子に見えるだけなのう・・・」

「くすっ、やつぱり男の娘じゃん」

「・・・ようやく笑ってくれたのう」

笑顔でそう返してきた

「・・・あっ」

笑うのなんていつぶりだろう・・・、最近の私は喧嘩ばかりして笑うことなんかなかった・・・。

昔はアキくんのおかげで明るくなっていつつも笑ってたのにな・・・、アキくん・・・。

あ、あれ？どうしてだろう、自分から突き放したはずなのに、なんで涙がでてくるんだろう・・・。

「ど、どうしたのじゃ！？ワシはまずいことをいつてしまったかのう！？」

あたふたし始めた男の娘を見て無理にでも笑おうとし

「・・・ぐすん、ははっ、な、なんでもないよ。ただ笑うのなんて久しぶりだなと思ってさ」

「なにがあつたのかのう？」

この娘の心配そうな顔を見たらなぜだか無意識に話していた。もちろん学校名とか人物名はふせてたけどね。

「・・・そうじゃったのか。大変じゃったのう」

「あう・・・や、やめてよ、頭なんか撫でないで・・・」

「おぬしはよく一人で頑張っているのう」

「うう・・・私はただ喧嘩しているだけだよ・・・き、聞いたこと無い？修羅の朔夜って、それが私なんだ」

どうせみんなと同じでひいたり、怯えたりするだろうと思った・・・

「む？おぬしが修羅かのう、知っておるぞ、悪鬼羅刹の次にやばい

と言われている女子がおるとな。」

「っ……！そっか、じゃあ、どうして……？みんなは修羅って聞くだけで怯えたりひいたりする……どうして君は怯えたりもひいたりもしないんだよ！！！」

みんなは通り名だけで怯えるし、私の姿をみただけで避けていく、なのに……なのにどうして……どうして……

「どうして怯えないといけないのじゃ？どうしてひかないといけないのじゃ？」

「だっ、だつてそれは！」

「修羅じゃからか？じゃがワシは怯えもしないしひきもせん。じゃから苦しむのはやめるのじゃ、一番の仲がよかった男の子を突き放しておぬしは悲しいんじやろう？」

「そ、そうだけど……いまさら……」

「弱気になってどうするのじゃ？おぬしは昔みたいに明るくいたいんじゃない？本当は昔みたく笑っていたいのじゃろう？」

「そ、そんなこと……」

「今のおぬしの顔はとても毎日がつまらなそうな顔をしておるぞ、さっきの笑顔は本当に楽しそうに笑っておった」

「うっ……そんなこといっても……またその男の子がいじめられたりしたら私……」

「じゃからもう喧嘩などやめるのじゃ、喧嘩などをいつまでも続けていたらその可愛い顔が台無しになってしまうぞい」

その一言で私は涙が溢れ出した、非行に走って初めて優しくされた、初めて心配してくれた、初めて……可愛いなんていわれた……

「ど、どうしたのじゃ！？またワシは変なことを！？」

「ち、違う違う……。違うから……」

「だ、大丈夫かろう？」

男の娘は私に近寄って顔を覗き込んできた

「うわっ！？ど、どうしたのじゃ急に」

「ど、どうもしないから・・・どうもしないからもっ少しづつさせてて」

私は男の娘の腕の中で泣きまくった。

・・・気づくと私は車の中にいた

「やっと起きたわね朔夜。」

「・・・お母さん？どうしてここに？」

「あなたが病院にいるなんて電話がくるからとんできたのよ」

「そ、そうだお母さん！あの女の子みたいな男の子どうしたの！？」

「ああ、朔夜を運んできてくれた子ね？私もお礼をしたかったんだけど帰っちゃったらしいのよ、それと朔夜にその子からの伝言、頑張るのじゃ」だってさ

っ・・・！また涙がこみ上げてきた。

このとき私は自分を変えたいと思った。

自分を変えて、ここまで変わった姿をいつかみせてみたいと思った。

「・・・お母さん」

「なによ朔夜？」

「・・・明日から学校ちゃんと行くよ」

「へっ・・・？」

「ちゃんと勉強もする・・・自分を変えてみたいんだ」

「・・・頑張んなさい」
「うん！」

こうして車の中でゆれながら深い眠りに落ちた。

二学期初日

私はまた避けられるんじゃないかと学校に行きたくなかったのだが昨日の男の娘の言葉を思い出し、勇気を出して学校へと向かった。

久しぶりの学校、久しぶりの校庭、久しぶりの教室、久しぶりにドアを開いた

「お・・・おはよう」

みんなの視線が一気にこちらを向いた、中には私を前にいじめていた子や昔友達だった子、それにアキくんもいたみんなの視線を感じながらも自分の席へと座るそこである生徒たちが

『なんでおまえみたいなのが学校きてんだよ！』

『そつだよ！修羅がつ！』

『ここはおまえみたいなのがくる場所じゃねえ！』

などとひどい罵倒がとんできた、そりゃそつだ。私はここ2年間まともに学校にも来ず、ましてや修羅などと呼ばれていた非行処女だからね

『やめるなよそういうこというの!!』

それは昔一番の仲良しだった主の声だった

「あ……アキくん……?」

「久しぶりだね朔夜……、元気にしてた?」

「えっ……あの……ど、どうして……?私なあ、アキくんのことを殴り飛ばしたんだよ……?こんなもう友達でもない私なんかかばって……」

「なにいつてるのさ朔夜、今でも僕らは友達……だろう?」

「あ……アキくん……」

「ちよ、ちよっと朔夜!?抱きつかないでよ、苦しい、苦しいから」

「ごめん……ホントにごめんね……」

「まったく……どうしたのさ朔夜」

「どうもしない……どうもしないよ……」

「泣き止んでよ朔夜あ」

こうして、仲が一番良かった友達と仲直りすることができた。

それからというもの、勉強を頑張り、明るい性格にもどった私は友達が増えていった。いじめも心配するほどでもなく、私もアキくんもいじめられることはなく中学校を卒業できた。

こうして私はいいや、裏の世界の修羅の朔夜を封じ、楽しい学校生活を送ることができた、あの子によって……。

「いや、病院でのお返しをしてないからさ」

「むう?別にどうってことないのにな」

「い、いいの!秀吉くんのおかげでアキくんとも仲直りできたしね」

「ほう……、あの男の子は明久じゃったのか」

「うん、そうだよ。それにしてもあのとときの秀吉くんはかっこよか

ったのにな」

「むう？あのとときわ？」

「いまじゃあ、私より可愛いじゃん」

「むっ・・・ワシなんかよりもっと可愛いぞい朔夜」

「・・・ふえ！？今なんて？声が小さすぎて聞こえなかった」

「も、もう言わないのじゃ！」

「どうしてよおー！もう一回、もう一回だけ！」

閑話 修羅と悪鬼羅刹と運命の人（後書き）

ううん・・・出来がまいちな？

とりあえず、次からは本編に戻ります

感想&amp;意見ありましたらお待ちしております

第十五話（前書き）

ふわぁ〜・・・

皆様、お正月いかがお過ごしでしたか？

私は・・・、寝てましたっ（テヘッ

第十五話

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったることだ。感謝している」

壇上の坂本がいつもと違う。素直に礼を言うなんて・・・まさかっ！？

「Fクラスの男子、戦闘態勢に入れ！あれは坂本じゃない、坂本に化けた偽者だっ！」

『『『イエツサー』』』

「おい待て、なぜ朔夜の号令で戦闘態勢に入るんだっ！？」

「甘かったね！化ける相手を間違えたお前の負けだっ！総員、右手にカッター、左手に上履きを持ったね！？」

『『『イエツサー』』』

「・・・よし、ならば総員突撃ー！」

「ま、待て俺は本物の坂本雄二だ！」

本当の坂本だって・・・？

「・・・ならその証明を、貴様の幼馴染わ？」

「・・・霧島翔子だ」

「よし、本物だね（ニヤツ）」

「おい、なぜいまニヤツとわらっ『総員突撃ー！！』なぜだっ！？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前に貴様を殺す！」

「朔夜、これが狙いかっ！？」

Fクラスの男子生徒の意見は言葉がなくても満場一致していた。クラスの団結って本当に素晴らしいと私は思うよ。

「遺言はそれだけか?・・・待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

「あまいよ、アキくん。まずこの手錠で手と足を拘束し、この紐で宙にぶらさげ、みんなの怒りの鉄拳を繰り出したあとに靴下は使うものだよ?」

「流石です総長」

やばい、楽しい、楽しすぎるこれ

さて、坂本はどんな悲鳴をあげるのだろうか

「あの、吉井君」

そこでゆっくりとみーちゃんが口を開いた

「ん?なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか?」

「そりゃ、まあ。美人だし」

あつ、アキくん、その答えはまずい気が・・・

「.....」

「え?何で姫持参は僕に向かって攻撃態勢を取るの!?それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険なものを投げようとするの!?!」

「.....えっ?アキくんわからないの?そっか、それはねえ、アキくん.....すう.....」

いきなり朔夜がしゃべってる最中に倒れこむように寝てるんだけど！？

「えっ？いきなり朔夜が寝ちゃったんだけど！？それと姫路さん！？そのハンカチはなに？」

「まったくさくやちゃんったら、あれほど早く寝ないといけませんっていったのに……」

「いや、だからそのハンカチ……」

「さくやちゃんは眠くなっちゃっただけです」

「だから、そのハンカチさくやちゃんは眠くなっちゃっただけです……そ、そつか」

「まあまあ。落ち着くのじゃ皆の衆」

パンパンと手を叩いて場を取り持つ秀吉。流石冷静だ……。が、ちらちら朔夜のほうを心配そうな目でみている

「冷静になって考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

……おお、そう言えば。

「むしろ、興味があるとすれば……」

「……そうだね」

僕らの視線が二人に集中する

「な、なんですか？もしかして私、何かしました？」

「・・・すう、すう・・・」

慌てる姫路さん。君はなにもしてないよ。強いて言えば朔夜になにをしたんだろう

「とにかく、ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけてやるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

最後の勝負を前に、皆の気持ちが一つになっている。そんな気がした・・・

「すうすう・・・」

一人を除いてだけどね。てか、朔夜はいつまで寝てるんだろう？

「皆ありがとう。そして残るはAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えている」

先日の昼食時に聞いた話だったので僕は驚かなかったけど、クラスの皆はかなり驚いたようで、教室中にざわめきが広がった。

『どついうことだ？』

『誰と誰が一騎打ちするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二がバンバン、と机を叩いて皆を静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

「ええ！？私じゃないの！？」

「うわっ！？・・・おはよう朔夜、急にどうしたの？」

「いや・・・なんか薬を盛られたような・・・うん。気のせいだよね」

「ああ・・・、うん。大丈夫ならいいんだけど」

「で、坂本、なんで私じゃないの！？私なら絶対勝てるって知ってていつてる！？」

私はこれでも坂本より、Aクラス代表のしょうちゃんよりも頭がいい自信はある。

「そうだよ雄二。馬鹿な雄二が勝てるわけなあっ！？」

そう口に出たアキくんの頬をカッターがかすめる。完全に殺す気だったね。

いや、あれでも一応友達だよ、まさか本気なわけがないよね！

「次は耳だ」

前言撤回、あれはアキくんのことを友達だと思っていない。

「まあ、明久の言うとおり足しかに翔子は強い。まともによりあえば勝ち目はないかもしれない」

「いや、だから私を使えば勝てるんじゃない？」

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？まともによりあえば俺たちに勝ち目はなかった」

「ねえ！？ものすごい無視だよねっ！？」

「・・・はあ。まともなぶつかって絶対勝てる確率なんて100%じゃないだろう？これから具体的なやり方を説明してやる・・・一騎打ちはフィールドを限定するつもりだ」

まあ、私だっつていつも勉強してないし、調子が悪かったらしようちやんに負けるかもしれないけど・・・、ていうか、坂本は絶対勝てる秘策があるわけだね！

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

日本史？しょうちゃんが不得意だっつて聞いたこともないし、坂本が得意だっつことも聞いたこともないんだけど？

「ただし、内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

あれ？その条件だと、満点が前提だから一問でもミスしたほうが負けってこと？

「でも、同点だったら、きつと延長戦だよ？そうになったら問題のレベルもあげられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言うとおりじゃ」

確かにアキくんの言うてることは正しいよね、けど、なにも作戦がないままあの坂本が言う出すなんてないと思う

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

「??それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか?」「
「いいやアキくん、しょうちゃんなら集中しなかったって小学生程
度のテストなら何の問題もないよ・・・坂本、もったいぶってない
でそろそろタネ明かししてもいいんじゃないかな?」

クラスの皆も私の言葉にうなづく

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

かぶりを振って、坂本は改めて口を開いた

「俺がこのやり方を選った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツ
は確実に間違えると知っているからだ」

ある問題・・・?なんのことだろう?

「その問題は 『大化の改心』」

「大化の改心?誰が何をしたのか説明しろ、とか?そんなの小学生
レベルの問題ででてくるかな?」

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もつと単純だ」

「単純というと 何年に起きた、とかかのう?」

「おっ。ビンゴだ秀吉。お前の言う通り、その年号を問う問題がで
たら、俺たちの勝ちだ」

大化の改心・・・?そんな基礎の問題をあのしょうちゃんが間違え
るかな?

「大化の改心が起きたのは、645年。こんな簡単な問題は明久で
すら間違えない」

いや、それはどうかな・・・？アキくんなら間違えるよきつと

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

へえ、やっぱり元神童だけあるよね。

「雄二よ。それこそ関根にやってもらった方が確実ではないのかのう？」

「おつ、いい質問だ秀吉。それが確実じゃないから俺なのさ」

「???どういう意味じゃ？」

「・・・こいつは日本史、歴史、地理、社会に分類される教科が大の苦手なんだよ、なあ朔夜？」

「・・・(ぷい)」

な、ななななんで知ってるの!?

私が苦手な教科がなんであいつにばれちゃってるの!?

「問題だ、朔夜。鎌倉幕府ができた年号はいくつだ？」

か、鎌倉幕府？えつとえつと・・・、鎌倉幕府はたしか・・・

「行こう！奴（1582年）は鎌倉幕府！」

「・・・、それは本能寺の変だ」

「えっ、そうなの!？」

・・・ねえ、みんなそんな可愛そうな子を見るような目で見ないでよ
なんか私がバカみたいじゃん!!

「こういうことだ。とにかく、アイツは一度覚えたことは忘れない。

だから今、学年トップにいる。しかし、小さい頃に間違えて嘘を教
えていたんだ、俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺た
ちの机は

「システムデスクだ！」

第十五話（後書き）

感想 & a m p . ご意見お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2801x/>

バカと少女と召喚獣

2012年1月6日00時50分発行